関西学院大学リポジトリ
Kwansei Gakuin University Repository

# <寄稿> トロント大学留学記（３）：ミシガン州立大学での博士号取得までの道のり



| | |
|---|---|
| 著者 | 武田 建 |
| 雑誌名 | 関西学院史紀要 |
| 号 | 27 |
| ページ | 159-230 |
| 発行年 | 2021-03-15 |
| URL | http://hdl.handle.net/10236/00029475 |

# トロント大学留学記（3）

## ～ミシガン州立大学での博士号取得までの道のり～

武田　建

IXX　ミシガン州デトロイトのメリル・パーマー研究所
1　修士号取得後の選択肢
2　メリル・パーマー研究所
3　インターンのためのプログラム
4　カウンセラーは三連続三振
5　乱暴少年ケン（小学四年生男児）
6　食事は女子寮で
7　ミセス・フォードとの想い出
8　タイガー・スタジアム
9　デトロイト・タイガース

XX　デトロイトからニューヨーク州へ
1　明日のことを思い煩いなさい
2　コーネル大学行き
3　ベンさんコネクション
XXI　ニューヨーク州コーネル大学での一年
1　イサカに到着
2　助手の仕事
3　関学社会学部専任講師
4　転校の準備
5　一か八かで、突撃だ！
XXII　ミシガン州立大学へ
1　さようならコーネル
2　メリル・パーマー・キャンプ
3　メリル・パーマー・フットボール
4　ミシガン州立大学では学生寮
5　グラデュエイト・アシスタント
6　ハロー統計学！
7　私設散髪屋
8　ミシガン州立大学の日本人先生

9　甲南大出身の名田祐介さん
10　タニタの剛一さんと計さん
11　コスガ家具の御曹司「康さん」
12　国連というニックネーム
13　寮生活
14　「日曜日はダメよ」
15　ワイワイコーラス
16　最後の年のアルバイト
17　カウンセリング・センター

XXIII　ミシガン州立大学での博士号取得
1　卒業のための試験
2　親友との共同戦線
3　ああ、コンピューター
4　総力結集
5　卒業式
6　私の就職先

XXIV　帰国前に
1　北米最後のキャンプ
2　トロントへのセンチメンタル・ジャーニー

3　バック・ツー・ミシガン州立大学
4　アメリカのお父さん、お母さん、さようなら

## ⅨX　ミシガン州デトロイトのメリル・パーマー研究所

### 1　修士号取得後の選択肢

トロント大学での二年間（一九五六～五八年）が終わったらどうするか？　恩師の竹内愛二先生が私のためにお立てになった計画ならば、すぐに関学へ帰って文学部社会事業学科の助手になるというのが第一の選択肢であった。関学での仲間たちは「お前は留学させて貰って、帰れば助手の仕事が待っている。羨ましい」と言ってくれた。

しかし、私は帰国しなかった。トロント大学大学院で社会福祉を専攻し、修士号（MSW）を取得した後、米国ミシガン州デトロイトのメリルパーマー研究所で臨床心理インターンとして一年、ニューヨーク州イサカのコーネル大学大学院児童心理博士課程で一年勉強を続けた。そして、一九六〇年九月からミシガン州イーストランシングにあるミシガン州立大学カウンセリング心理学博士課程に移り、二年後の一九六二年六月に博士号（Ph. D）を取得した。

この間に、母校関西学院大学では大きな変化があった。文学部の社会学科と社会事業学科を基盤として、マスコミュニケーションと産業社会学を加え、四つの専攻をもつ社会学部が一九六〇年四月に開設されることになった。博士号を取得し、帰国した年の一九六二年一〇月、私は社会

学部の社会福祉専攻の専任講師として採用された。

このようなことになろうとは、修士号を取得した時点の私には知る由もなかった。ただ、トロントで私がひしひしと感じたのは、北米でも社会福祉の大学院教育はまだまだ萌芽時代だったということである。その頃、トロントの社会福祉大学院の専任教員の四分の三はまだ博士の学位を持っていなかった。そして、学術的によほど傑出した本か論文を書かなければ、博士の学位を持たない教員はほとんど准教授止まりが相場で、教授への昇進は難しかった。つまり、博士の学位を持つ先生と持たない先生の間には、目に見えるか見えないか知らないが、一本の太い境界線が引かれていたのだった。我々院生はそんなことは気にしていなかったが、先生たちの心のなかはどうだったのだろう。

ほんの少しだけだが、大学教員への路線の上に乗せられかけていた私に、アドバイザーのボイントン先生は、「私がＹＷＣＡで働きながら修士の学位を取得した頃は、福祉の専攻で博士の学位を出せる大学院はカナダには一つもなかったわ。昨年、日本へ行ったグレアムさんがトロント大学で初めて社会福祉の博士の学位を授与されたのよ。でもね、ケン。貴方はまだ若い。日本へ帰ろうとカナダに留まろうと、働いてお金を貯めて、チャンスがきたら博士の学位に挑戦することを薦めるわ」としんみり話して下さった。

私が大好きなゴッドフリー先生も「ケン、私は博士の学位を持っていないのに、何故か教授として採用されたの。でもこれからは、大学教員にとって博士の学位は不可欠の条件になると思う。貴方は若いから修士が終わったら働いて、お金を貯めて、また大学院に戻ってきなさい。博士課程の院生には調査の手伝いとか授業の助手とかいろいろ大学が仕事を用意してくれると思うわ」

と励まして下さった。

お二人の先生の励ましが「そっと」私の背中を押して下さったのだろう。修士号取得後、帰国する予定だった私の留学生活は、国境を越えた米国でさらに四年も続くことになった。カナダ合同教会の奨学金を得ていたトロント時代とは異なり、米国での四年間はインターンや助手の仕事が切れたら即日本送還という綱渡りだった。

そうした事情も含め、今改めて振り返ってみると、結局六年余りにおよんだ留学生活のはじまりと基盤はトロントにあった。最初の二年間に学んだことが、その後の四年を支えてくれた。したがって、六年間の北米留学生活にタイトルをつけるなら、「トロント大学留学記」とするのが、私には一番しっくりくると思う。

## 2　メリル・パーマー研究所

お正月にセントトーマスの西本さんのお宅で留守番をしている間に、流感でふらふらしながら関学の嶋田津矢子先生に手紙を出して、先生がご帰国前に一年間ポスト・マスターの勉強をなさったデトロイトのメリル・パーマー研究所の住所を教えて戴いた。

児童の発達を中心にさまざまな研究と教育をおこなっているこの機関は、一九二〇年にメリル・パーマーという富豪のご婦人が結婚・育児・家族といった領域の研究と教育がこれからの若者の幸せな家庭生活には必須であると考え、その拠点づくりのために大きな遺産を寄付したのが発端だった。そして、私はメリル・パーマー研究所のカウンセリングのインターンとして一年間過すことになった。私のコース以外にも、児童心理学や家族に関する研究に何人かの大学院生がいた。

そして秋、あるいは春学期には、全米の提携大学から三〇～四〇名の学部生が幼児教育の集中的な授業を受けるためにアメリカ各地から集まってきた。教員のなかには文化人類学者ドロシー・リー、結婚カウンセリング学会長のエイロン・ラトリッジ、来談者中心療法の子どもの心理治療で有名なクラーク・ムスタカスなど一騎当千の人たちが揃っていた。

メリル・パーマー研究所は、デトロイト市の中心を走るウッドワードという目抜き通りにほぼ面していて、この大通りを隔て反対側にはウェイン州立大学という大きな大学がある。一九八二年にメリル・パーマー研究所はこの大学に統合された。残念ながら、私が訓練を受けた臨床部門はこの合併で消滅したが、それ以外、特に幼児・児童に関する研究と教育部門は今もそのままの形で継続されている。

一九五八年の八月末のある日、私はダウンタウンのデトロイト駅からタクシーでメリル・パーマー研究所の本部棟に到着した。この本部棟、一階と二階だけの建物だが実に立派で広々とした造り、何ともいえない貫禄があり、若造の私なんかが気楽に出入りし難い雰囲気の建物だ。聞けば研究所の全ての管理機能がこの建物に集まっているそうだ。スタッフはそれぞれきちんとした服装をしている。授業が始まっていないトロント大学の寮の「だらしない」服装できてしまった私は、早速臨床という場で働く者の服装心得という洗礼を受けてしまった。

本部棟のスタッフは、ごく簡単にここの運営を私に説明してくれた。そして、明日から秋学期が始まるけど、私は本部棟のお向かいにあるカウンセリングの建物にゆけば全てが準備されているから心配無用とのことだった。そして、私が住む男子用の小さな二階建ての家に案内してくれた。

その日の午後遅くになって、本部棟に二人のインド人学生が別々に到着。彼らより数時間早く到着しただけだが、「先輩」面をして、急いで本部棟へ迎えに行く。握手をして自己紹介をした後、寮まで案内した。先に到着したシャンティ・タヤールさんは私と同じカウンセリングのインターン、もう一人の若いインド人の名前がどうしても想い出せない。そもそも覚え難い名前だったことは記憶している。

## 3　インターンのためのプログラム

カウンセリングのインターンのオリエンテーションは朝九時からと聞いていた。男子寮に住む三人のなかでシャンティと私はインターンなので連れだって少し早や目にセンターへ到着。受付にいる女性職員に案内され、大きな居間風の部屋に並べてある椅子に座って話をしていると、仲間のインターンや教員でもある臨床スタッフがやってきて、すぐに部屋は一杯になった。

私が履修する講義の一つはエイロン・ラトリッジ先生の心理療法セミナーだった。現在、米国結婚カウンセリング学会の会長である。先生の豊富な臨床経験のなかから、時に応じてトピックが選ばれる授業だった。

もう一つはガートリュード・モントゴメリー先生（愛称：ツルーディ）の臨床面接で、入門的な面接の進め方に始まり、次第にさまざまな技法を事例に交えて講義が進められた。初心者の私にとって、知識不足を補う絶好の講義だった。

私は履修しなかったが、メイソン・マシューズ先生は、米国臨床心理学会の元会長で、ロールシャッハ・テストの講義をしておられた。

また、毎週二回、ケースカンファレンスがあった。一つは新たな患者の受理面接で、そのケースを誰が担当するかを決めていた。もう一つは進行中の患者の治療の中間報告で、インターンが担当ケースの報告をし、全スタッフとインターンが診断と治療について議論を戦わせた。

このほか、毎週原則として二人のスーパーバイザーは、ロジャースの来談者中心療法の流れをくむクラーク・ムスタカス先生と一〇〇％の視力障碍者ながら、素晴らしい心理療法家であるジョン・ハドソン先生だった。我々インターンは面接が終わると、すぐに記録をタイプで打って、翌日までにスーパーバイザーへ届けなくてはならなかった。

## 4　カウンセラーは三連続三振

ハドソン先生のもとでは、三人の患者が三人とも初回面接の後、帰ってこなかったため、カウンセリングが中断してしまった。トロントでの臨床実習で私はローティーンのグループを担当していたので、その流れでこの年代の若者を担当することになった。でも、トロントではグループワークだからうまくやれたので、ティーンの個人面接は難しいとスーパーバイザーに申し上げたが、「大丈夫」「トロントでやれたから」と押し切られてしまった。私の不安がそのまま面接中に出たのだろう。結果は最悪の三連続一回目で中断、つまり誰も二回目には現れなかった。指導をして下さるハドソン先生にスーパービジョンの時間に泣きつくと、すぐラトリッジ先生に電話して、「ケンが困っているから絶対に中断しない患者をよこしてくれ」と無茶苦茶なリクエストをして下さった。そのお陰だろう、次週からの担当は長い間ここのクリニックに通っ

てきている年配のご婦人で、新米でも、英語が下手でも、ここのクリニックならば誰がカウンセラーでも喜んで通ってきてくれる奇特な患者を担当。彼女が私に自信をつけてくれたのだろう、次のクライアントからは誰もドロップアウト、つまり中断する患者は出なかった。やれやれ。

## 5　乱暴少年ケン（小学四年生男児）

担当者を決める受理面接後のカンファレンスでは、学校で他のクラスの女の子の頭を石で殴りつけた「乱暴な小学校四年生男児」というイメージだったケン少年は、いざプレールームで治療を開始すると、何も言わず、何もしないで、じっと下を向いたままうずくまって動かなかった。こんなセッションが続いても、指導者のムスタカス先生は「ファイン」と言って何もおっしゃらない。でも、私の方は結構焦っていた。三回目のセッションでしびれを切らした私は、プレールームに置いてある玩具のピストルを拾うと、ケンにトスしながら「ドロー」つまり「撃て！」と叫んだ。私がもう一つの拳銃を拾うと、カウボーイとインディアンよろしく、銃撃合戦を繰り広げた。今まで部屋の隅で下を向いて黙り込んでいたケンが、私との遊びに熱中したことを記録に得々として書いて、スーパーバイザーのムスタカス先生にとどけておいた。

次のスーパービジョンを受けにゆくと、いつも笑顔のムスタカス先生が少々ご機嫌斜めであった。叱られはしなかったが、「君の方からガンを投げた結果、ケンが自由に玩具や遊びを選ぶ権利と機会を奪ってしまった」と言われた。その通りだ。理論的にはその通りなのだが、私が拳銃を彼にトスしたことで、彼と私の間の交流が進んだし、彼もセッションを楽しみ、とても活発になったことを先生に申し上げて「反論」したのだが、結果は悪くなる一方だった。

日本の国では、昔から「三尺下がって師の影を踏まず」と言う。この際、わが国の先達が残した教訓にしたがい、先生と私との間の冷たい壁を取り払おう。「今後は、ケンの赴くところ、やるところについてゆきます」と言って、先生に全面降伏である。来談者のケンは、私の窮状を知ってか知らずか、次回からはもっと積極的に私にかかわってきた。

夏休みが近づき、学校でのケンの行動が大幅に改善されたという報告がきたし、夏休みの間、家族旅行でヨーロッパに行きたいという両親の希望もあった。夏休み前にケンの遊戯療法は終了になった。ケンとの最後のセラピーを終えて、入口で待つお母さんにご挨拶をしていると、ケンがいきなりお母さんの車まで走って行った。しかし、いったん途中で止まり、私の方を振り向いて「追いかけてこないの？」と言わんばかりの顔をした。追いかけるべきか、留まるべきか？心の中では「追いかけたい」私と、「セラピストらしく見送れ」という私がいた…。私は二、三歩追いかけ、そこで立ち止まり、手を振った。

## 6　食事は女子寮で

基本的に、我々男の学生は三つある女子寮に一人ずつ割り当てられ、ご飯を食べさせて貰うことになった。但し、一カ月ごとのローテーションで宿舎を変わらなくてはならない。食事の献立は、女子学生が自分で考えた献立をコックに渡し、調理してもらう。これはなかなかいい考えだと思う。世の中にはいい献立を作り、料理も上手な人もいる。だけど、大学生にそんなことを要求しても、なかなか出来るものではない。しかし、お母さんの献立を持ってくるだけならば、誰だって素晴らしい食事を提供できる。美味しい料理が出でくれば学生のお手柄、あまり美味しく

なければコックさんの責任。寮担当の学生部長もうまいことを考えたものだ。

寮長は、各ハウスに滞在する院生のなかで最高齢の女性と決っているようだ。一番無理のない任命方式である。三人のハウスマザーとよばれる寮長と私は専攻が違うから、寮以外で会うことはない。最初のハウスのマザーは、アメリカ人の看護師さんだ。子どもの病棟のヘッドをしていたらしい。二番目は、フィンランドの大学の先生で、発達心理学が専攻。三番目は、あるキリスト教の教派所属の子どものテレビやラジオ番組担当者だった。子どものための教材やテレビやラジオのプログラムの制作に携わっているらしい。今まで、子どもに関する勉強や研究と言えば、小学校の先生か大学で「発達心理学」を教える人しか考えたことがなかったが、ここにいるハウスマザーの仕事を聞くと、心理学の専攻者にも、非専攻者にもさまざまな生き方があることを教えられ、嬉しくなった。全米から集まってきた女子学生も、自分の将来は学校の先生だけではなく、いろんな生き方があることを知って視野が広くなるだろうと感心する。

多少つくりは違うが、基本的に三つの女子寮の一階は、玄関に近いところがリビングルーム、その奥に一〇数名が座れるダイニングルーム、さらにその奥がキッチン。二階と三階が寝室で、基本的にはツインルームだろう。残念ながらお邪魔したことがない。朝食と昼食は食堂に来て、並べてあるお料理を勝手にとって食べるカフェテリア方式だが、夕食は原則として全員そろって食べる。服装はちょいフォーマルだ。一九五八年は大昔である。朝と昼はジーンズでも綿パンでもOKだが、夕食はスカートかドレスだ。ただ、折角スカートをはき、少しはお化粧をしてくるのに、いつも男性が私ひとりとは申し訳ない！　年が少し離れていても、東洋人であっても、男の匂いがすると嗅いで見たいものだろう。それは双方向に言えることだ。

## 7　ミセス・フォードとの想い出

メリル・パーマーの理事に、あのフォード・モーター・カンパニー社長夫人がおられることは、遠く日本の国で嶋田津矢子先生からうかがっていた。だが、まさかこの私がフォード夫人のお手をとり、エスコートする栄に浴するなんていうことは考えもしなかった。

なんの会だったか、下々の私は知る由もない。ただ、或る雪の降る日の午後、私が食事にお邪魔しているハウスで理事会の小委員会が開催された。雪が降り出したので、お客さまがお帰りのときに、雪で滑ったら大変と、雪かきのボランティアとして、家のドアと道路で待機する車との間の石の道に降り積もる雪を箒（ほうき）で掃いていた。雪やコンコン、霰（あられ）やコンコンだ。箒で雪を掃いても、掃いても、すぐまた積もる。フロントヤードの芝生がこんなに広いとは思っていなかった。しかし、箒で雪を掃きながら、行ったり来たりしていると結構な距離である。私が箒で車道まで掃いていったときに、フォード夫人のお帰りだ。飛んで行って、おそるおそる腕を差し出す私に、「有難う」に加えて、直訳すれば「貴方は最大のお助けよ」とおっしゃって下さった。

ミセス・フォードは沢山の団体の役員をしておられる。その一つがデトロイト交響楽団の理事である。そして、私たちメリル・パーマーの学生はその余得にあずかった。デトロイト交響楽団のシーズンチケットを割引で購入できたのだ。フォード夫人のご配慮だ。天井桟敷の最後列だったが、それこそ「メニー・サンクス」である。

全くの余談だが、二〇一八年にデトロイト交響楽団が大阪のシンフォニーホールにやってきた！　これは行かねばなるまい。曲もなにも忘れたが、終わりにアンコールが一曲あった。我々聴衆は更に拍手を続けた。それに応えて演奏されたアンコール二曲目が、なんと阪神タイガース

の「六甲おろし」だった。彼らはデトロイト・タイガースの街から阪神タイガースの街にくるので、ちゃんとこの街だけのアンコール曲を用意してきたのだ。やるね！

## 8　タイガー・スタジアム

デトロイトの観るスポーツと言えば、フットボールはライオンズ、野球はタイガース、アイスホッケーはレッドウィングスだ。日本に帰る前に一度でいいからプロフットボールは見ておきたい。児童心理学の先生にライオンズファンがいらした。彼にどうすればライオンズの試合切符を買えるかを尋ねると、ほとんどの切符はシーズンチケットとして開幕前に売り切れてしまう。しかし、タイガー・スタジアムに買いに行けば、バラ売りが手に入るかもしれないと言う。一週間前から売り出すそうだ。

幸い、私は月曜日の午前中は面接もスーパービジョンもはいっていない。善は急げ。明日の月曜日、バスに乗ってタイガー・スタジアムに「ライオンズ」の切符を買いに行こう。

スタジアムに行くには、ウッドワードのバスをダウンタウンの停留場で降り、スタジアムの前を通るバスに乗り換えだ。黒人の運転手は「スタジアム」とアナウンスするだろうが、果たして私がアナウンスをキャッチできるかが心配だ。「見ることは信ずることなり」と中学部の英語で習ったことを思い出す。バスの窓から外を見て、自分の目で確かめて、隣の小父さんに「タイガー・スタジアム？」と聞いてから降りる慎重さ。意外に古ぼけた球場で、さびれたようなチケットオフィスだ。「ワン・ネックスト・ゲーム」というと「バルティモーだぞ！」と言う。もう一寸で「ライオンズの試合だ」と言いかけたが、「相手のチームを教えてくれた」のだと分かった。それ

なら「ザッツ・グレイト！」と言えばいい。ついでに、今シーズンの試合の日取りを貰っておこう。

デトロイトも一〇月になると寒い。土地の人はいい気候だと言うが、私には西宮の一二月の寒さに匹敵する気がした。幸い、次の日曜日は晴天のインデアン・サマー。お日様が照って暖かかった。相手のチームにはジョン・ユナイタスという名クォーターバックがいて、走るのはさして脅威ではないが、守備が捕まえる前にどんどんパスを投げてくる。ナンバーワンのターゲットは、足は遅いが捕球は抜群のレイモンド・ベリーだ。スピードがないから守備はマン・ツー・マンでべったりマーク。だが、外に直角に曲がるコースと内側に弧を描いて入って来るコースなどを上手に組み合わせ、内と見せて外、外と見せて内へ走る。相手が頭に来てだんだん「べったりマーク」にきたら、短いパスと見せて縦に一発ロングパスだ。この長短絶妙の組み合わせにデトロイトはやられてしまった。

この試合では、長短、そして内と外のパスをどう組み合わすかを教えて貰った。デトロイトではカウンセリングの勉強で、貴重な経験を沢山させて戴いた。だが、関学の教職員、学生の皆さんには、関学が甲子園ボウルでどんなパスで日本大学の守備陣を崩すかの方が、面接の技法よりずっと評価が高かったような気がする。

## 9　デトロイト・タイガース

アメリカのスポーツはシーズン制である。秋にはフットボール、冬にはバスケットボールとアイスホッケー、春から秋にはベースボールで一年がまわる。八月半ばを過ぎると、街のスポーツ用品店にはフットボールの防具やボールが並んでいて、グローブやバットは店の奥に仕舞われて

いる。お願いすれば出してくれるのだろうが、店内の見えるところには置いてない。

大学のフットボールのリーグ戦は一一月で終わり、一月にはボウル・ゲームという招待試合が始まる。有名なローズボウルなど幾つかの大きな試合は一月の上旬までもつれこむ。だが、一月はもう完全にバスケットボールのシーズンだ。そして、三月末にはメジャーリーグが開幕し、四月になって米国の北の街でも暖かくなると、本格的な野球のシーズンだ。

私は寒さが嫌いだ。私が子どもの頃は今のようにセントラルヒーティングも、冷暖房機もなかった。誤解を避けるために申し上げるが、父の収入が乏しくて冬でも部屋を暖かくできなかったわけではない。その頃は、日本中どこの家に行っても火鉢ぐらいしかなかったのだ。あんな土の親戚の様な灰の真ん中に、ちょこんと炭火を置いて暖をとれなんて、今なら人道問題だ！

春とともに野球のシーズンがやってきた。テレビで放送はあるが、それでは自分の家や学校の寮で見るのと同じではないか。アメリカの大学生のほとんどは、メジャーリーグのチームなんかない小さな町からやってくる。アメリカは広い。野球を見に行こうと思えは、片道二時間はおろか、三時間でも四時間でも車で走るのは当たり前だ。学生をタイガースの試合に連れて行ってほしいと寮長から頼まれた私は、「喜んで行きますよ！」と二つ返事で引き受けた。

行きのバスは、ダウンタウンで乗り換えて球場まで乗った。切符を買って球場に入ると、案の定がらがらだ。数ケ月前のライオンズの満員の試合とは全く違う観客数に驚く。これならば阪神タイガースどころか、阪急ブレーブスだって観客数はずっと多いぞ。スポーツはポジティブ・シンキングでいこう。球場のあちらこちらから試合を楽しむことが出来る。

プレーボールまでに時間はたっぷりある。昼食のサンドウィッチは自家製を持ってきた。だ

が、飲み物がない。ビールやコークは売りにくるが、コーヒーはどうか？　球場の上の方に一大売店街があったのを想い出した。売店まで行ってみよう。だが全員で行ったら席と荷物の番人は誰がする？「僕が留守番をするけど、誰か一人ぐらい残ってくれるか？　僕は英語がしゃべれない！」。今まであまり話したことがないお嬢さんが残ってくれた。皆が買い物に行っている間に自己紹介をする。アイオワからきたナンシー・モンソンさんだ。彼女がいれば、何か英語を話さなくてはならないような緊急事態が起こっても大丈夫、大丈夫。ボーイスカウトではないが"Be prepared !"（備えよ、常に）だ。

そろそろプレーボールだ。一応、引率者として全員に連絡しておきたいのは、七回に「テイクミー・アウト・ツー・ザ・ボールゲーム」の歌をみんな一緒にここの席で歌おう。そして、ゲームセットまでいるのか、その時点で帰るのかを多数決で決めよう。「それでいいですか？」。全員賛成し、ラッキーセブンまでいったん解散。但し、「私は責任上、トイレ休憩以外はこの場を離れません！」。　皆、大笑いだ。何がおかしいのか知らないが、お嬢さんたちは直ぐ笑う。そんな行動は、"There is no east and west."である。

七回の裏がやってきた。「全員集合！」なんて言っても書いても、その昔「ドリフターズ」なんていう面白いグループがあったことなど読者のご記憶にないでしょう。え？ご存知ですか？それは失礼。でも、メリル・パーマーのお嬢さん達はご存じないと思います。知ろうと、知るまいと、ラッキーセブンが終わったら、直ぐに帰るか帰らないかを多数決でしたね？「帰ろう」が圧倒的多数だ。善は急げ。今ならバスに乗れるぞ！　だが、それは甘かった。停留所には大勢の人がすでに並んでいる。これは私自身への内緒話だが、バス停に並んでいる人たちは人相も服装

もヤバそう。こちらは一〇名の白人妙齢レディスをお連れしているちっぽけな東洋人だ。じっとバス停で待っていて、もしものことがあるといけないので、「一〇〜一五分ばかりダウンタウンまで歩こうと思うけど、一緒に歩いてくれるか?」。全米の大学から選りすぐって送られてきた女子学生である。物分かりは実に良い。「レッツ・ウォーク・ウィズ・ケン」ときた。私が先頭で、しんがりはモンソン嬢だ。私は心の中で「ワン・ツー・スリー・フォーと号令通り歩いてね!」、「プリーズ」と囁いた。アメリカの子どもが親に何かせびるときには、かならず最後に「プリーズ」をつける。そうそう、この時の隊形は二列縦隊でした。一列では隣がいないから心細い。三列では横に広がり、通行人の邪魔になる。こう見えても、いろいろ熟慮の末、二列に決めたのですよ!

## XX　デトロイトからニューヨーク州へ

### 1　明日のことを思い煩いなさい

長足の進歩は期待できないが、インターンとしての臨床活動もなんとか分相応に動き出した。英語は相変わらず上達しないが、カウンセリングの実践は、相手の話に耳を傾けている限り、さほど高度の英語力を必要とするわけではない。もちろん、カウンセリングでも、カウンセラーが能動的な役割をとらなくてはならない立場、例えば行動療法的なアプローチを実践しようとすると、かなり積極的な関わりを必要とされる。しかし、多くのカウンセリングの学派とそのアプローチでは、相談に来た人の話に耳を傾けることに重点を置くようだ。こういった理論的立場とその技法を選ぶならば、ある程度の英語力があれば、何とかカウンセリングをやれるのではないだろ

うか。そんな一種の自信の様なものが、ほんの少しずつだが自分の心のなかで感じられるようになってくるのだった。

メリル・パーマーでの訓練のことは、ミシガン州やオハイオ州といった近くの大学院ならば単位として十分認めてくれることも分かってきた。そのことを私の教育分析に毎週通っているプラット先生に話すと、入学許可は問題ないだろうが、奨学金や助手の仕事をとるのが難しい。だから、できるだけ早く入学許可だけではなく、助手の仕事の申し込みをするよう薦めて下さった。

願書の提出は自分自身のためであるから、当たり前のことだ。だが、良い推薦状を書いて戴くのが鍵である。その前に、どこの大学で何を専攻するかを考えなくてはならない。今、デトロイトで勉強していることは、関学の社会福祉の大学教育の中心的な流れと極めて親和性が高いと思う。だから、このままカウンセリングという対人援助の理論と技法を勉強したいと思う。それならば、この付近のミシガン大学かミシガン州立大学のカウンセリングがベストだろう。善は急げ。直ぐに両大学に願書とアシスタントの応募願いを取り寄せる手紙を書いた。推薦書は関学の竹内愛二先生、メリル・パーマーのラトリッジ先生、トロントのボイントン先生の三人にお願いするとしよう。

メリル・パーマーの奨学金がすぐに戴けたので、今回も同じように行くだろうという安易な気持ちがあった。しかし、現実はそんな甘いものではないことを直ぐに思い知らされた。ミシガン大学からもミシガン州立大学からも入学許可は来たが、アシスタントシップの採用通知はこなかった。アシスタントに採用されなかったら、仕送りがまだ許されない日本からの留学生の私は米国にいることが出来ない。

悩んだ末、昨年の夏の後半一カ月間リーダーをしたトロント郊外のユダヤ人の子どものキャンプで私のスーパーバイザーだったベン・スレッセンジャーさんに相談の電話をした。彼はトロントの社会福祉の大学院で修士の学位を取得した後、ニューヨーク州のコーネル大学の児童発達の博士コースで博士の学位を取得していた。そして、トロント大学の社会福祉大学院の准教授として教え始めるところだった。キャンプで彼と私の将来、特にドクターコース進学を話し合ったとき、彼は「児童発達のコースは必ずしも武田君向きとは言えないな」という結論だった。しかし、今の私は自分の好みとかなんとか言っていられる立場ではなかった。どこかの大学からアシスタントの口を貰わなくては、夏には本国送還である。コーネルの願書には、スレッセンジャー博士にも推薦状をお願いした。そして、それが大きなバックアップになった。

スレッセンジャーさんはコーネル大で博士の学位をもらったばかりだった。児童発達の先生とはお互い良く知りあっている仲だ。それにコーネルの児童発達は心理学に極めて近い専攻なのだが、心理学科のなかにはいっていなかった。したがって、この専攻の大学院を応募する人が少なかったことが私にとっては幸いだった。いろいろ難しいこともあるだろうが、この一年間はコーネル大学で勉強しながら今後のことを考えよう。

## 2　コーネル大学行き

四月に入って、合格とアシスタントとして採用の正式通知が来た。ベンにお礼の電話をするとともに、メリル・パーマーの先生たち、特にツルーディー・モントゴメリー先生には詳しい経過をご報告した。彼女は、コーネルに行ってプログラムをよく見て、そこでケンが博士の学位を取

得するまでいてもいいと思えばよし、もしそうでなければ早めに決断して、ミシガン州立大学のカウンセリングに転学を考えようと言って下さった。多くの人たちの信じられないほど沢山の支えによって、少なくともあと一年、アメリカで大学院生活を送ることが可能になったのである。

## 3　ベンさんコネクション

ベンはいろいろ私のことを心配してくれた。まず、私の住み家である。コーネル大学はイサカという町の外れの山の上にキャンパスがある。大学生の多くはキャンパス内の寮に住むか、キャンパスの近くのアパート住まいだ。しかし、家賃は高い。それで、「友だちの友だちは、また友だちだ」というご縁で、イサカの町に住む大学職員のお宅に下宿して、ご主人が出勤するときに一緒に大学へ行き、仕事を終えて帰るときにまた乗せてもらうというのはどうだと提案してくれた。どうもこうもない。私はイサカの街など行ったこともないし、街と大学までの距離すら分からない。でも、送迎つきの下宿は悪くない話だ。知らない場所に、言葉が不自由な人間が一人で行って、おたおたしながらアパート探しをするよりも、この際ベン交通公社に全てをお願いしてしまおう。コーネル大学のことは、九月に授業が始まるまでは、心配ご無用だ。

ベンのお陰で、メリル・パーマーでの臨床活動と訓練に最後まで専念できた。ここでの全ての臨床活動が終って、コーネルに出発するまで二週間ほどの期間があった。ツルーディーは、彼女の家から車で三〇分ぐらいのところに、少年院から出てきた子どもが家庭復帰をするまで、彼らを預かる「ハウス」があるから、そこで見学方々滞在するか？と尋ねてくれた。私は行き先がない身の上だ。どこでもタダで三食付きの所ならば「お願いします」。だんだん、分ってきたが、ツルー

ディーのご主人のキングスレー（愛称：キング）はミシガン州オークランド郡の教育委員会のチーフ・サイコロジストなので、いろいろな施設や機関と親しいようだ。英語は不自由なのに、子どもを集めてフットボールをさせる珍しい東洋人がいるものだと施設長が驚いているうちに、私は子ども達の大好きな兄貴分になっていた。

## XXI　コーネル大学での一年

### 1　イサカに到着

ツルーディーとキングに見送られて、二つの別送トランクに加え、大きなスーツケースを抱え、イサカへ出発である。大きな希望を抱きながらも、心の中ではこれが自分の本当に求めている行き先なのか不安を感じていた。ツルーディーは、「もし、コーネルのコースが急な坂を登るような感じならば、何時でもミシガン州立大学へ転校を考えましょう。でも、早くしないとアシスタントの口はないわよ」と、最後の最後まで私のことを心配して下さる面倒見の良い先生であり、米国のお母さんだった。

イサカの駅に着くと、これから下宿をする家のお父さんのディックが迎えに来てくれていた。これから一年、ご厄介になる方だ、丁寧にご挨拶。ただ、申し訳ないのだが、リチャード（愛称：ディック）というファーストネームは想い出せるのだが、ラストネーム、つまり苗字が出てこない。ざっと半世紀と一年前の出来事である。認知症予備軍のお爺さんの想い出話だ。平にご容赦戴きたい。お嬢さんお二人にはちょっとしたお土産を持ってきたが、何だったか？　もちろん、そん

なものは覚えてない。

この家族のお宅がイサカの街のどの辺にあるのかもよく分からない。キャンパスまで歩けないことはないだろうが、ご主人の出勤と一緒に出て、帰りに大学で拾ってもらわないと、効率が悪いことおびただしい。予想通りの問題だ。

## 2　助手の仕事

私の助手としての仕事は、ダルトン教授の「子どもの心理と発達」という授業に出て、先生の講義内容を理解し、授業を受けている学生の質問に答えたり、タームペーパーと言われるリポート作成の相談にのり、必要に応じてお手伝いをしたり、最終的には採点することだった。

ダルトン先生はご定年前の老教授といった感じの方で、私が助手をする講義の柱となる理論と方法のひとつは精神分析であった。これは、私にとってはラッキー以外の何物でもなかった。一九五〇年代の北米（そして関学の）社会福祉の基礎理論、特に人間理解の枠組みの中心は精神分析だった。そのことをダルトン先生もご存じだったようで、それが私のアシスタント採用のプラスの条件になったのだろう。外にロジャースの来談者中心療法のなかの人間理解、また、学習理論のうちでオペラント条件付けとモデリングも大切な理論であった。このうち、学習理論は私にとっては未知とは言わないが不得意な分野だった。後に関学の教員になってから、その重要性を感じ、文学部のハミル館、つまり心理学科の新浜邦夫先生、宮田洋先生、今田寛先生の研究室やゼミナールに押しかけ、家庭教師をしていただいたことを感謝とともに想い出す。さらには、アメリカの行動療法の権威者であるテンプル大学のウオルピ先生やミシガン大学のトーマス先生

といった世界的な権威からも直接教えて戴くことになろうとは、この頃の私には思いもよらぬことだった。

授業に出席するのは、ダルトン先生がどんな領域をどんな内容でどう説明なさるかを理解するためである。この内容について、大勢の学生が尋ねにくるだろうから、それに備えておくようにと先生は言われた。しかし、学生は誰も来ない。私は開店休業である。来る日も来る日も、同じである。そのことをダルトン先生に報告すると、「ケンのところを訪ねてごらん。きっといいヒントや注意点を教えて貰えるから」と、授業中、私のＰＲをして、私を訪ねるよう学生に薦めて下さった。先生のそうした気配りと言うかご配慮が嬉しかった。授業が終わると、早速学生が質問を持ってやってきた。私の実力を試そうとしたのかと思っていたが、みんな履修している心理学の内容について疑問を抱き、迷い、つまずき、それに対するＳＯＳの発信だった。

英語の制約があるためだろう、学生との個人面談は長くなりがちだった。すると、ある学生がスケッチブックのような厚紙のノートを持ってきて、一週間に三～四時間、私が学生と面接できる日付、曜日、時間を書き、そこに学生がサインするようなシステムを作ってくれた。さすが、名門コーネル大学の学生さんである。感謝、感謝。だが、これによって、相談に来る学生の数がいっぺんに増えてしまった。

記憶は随分薄れているが、質問のなかには「フロイトの概念がどのくらい現実性があるのか」といった類の質問が幾つもあった。精神分析の弱点を見事に突いている。確かにフロイトの防衛機制を見ると、現象としてそういった心理的な動きはあることに異議はない。しかし、それをどうやって実際に取り上げ、測定し、強弱を調べるのかは実証が難しい。それがフロイトの理論の

弱点であるのかもしれない。私が答える前に、学生の方が答えを用意していることも少なくなかった。学生と別れる時、「貴方に良いポイントを教えてもらった。ありがとう」と、私は学生のプラスの点を必ず言うようにしていた。英語の発音は悪くても、自分の良い点を指摘された時、学生にはすぐに伝わるようだ。私の人気が上がってきたことをダルトン先生は大いに喜んで下さった。

## 3　関学社会学部専任講師

無事コーネル大学に着き、助手の仕事も軌道に乗りつつあることを関学の竹内先生にご報告した。すると、折り返し、関学でも大きな変化があり、文学部の社会学科と社会事業学科を基盤としてマスコミュニケーションと産業社会学を加え、四つの専攻をもつ社会学部を開設する予定で、私を社会福祉専攻の専任講師採用予定者として文部省に提出する旨のお手紙を頂戴した。ありがたいことではあるが、このままコーネルにいても、またミシガン州立大学に移っても、今から三年以内にPh.D.の学位を取得することは相当厳しいスケジュールであった。

米国の博士課程は、入学後、大学によっては博士の学位に挑戦する権利を得るため「資格試験」（プレリミナリー）を経て、それから論文を書くのに値する学生かどうかを決める試験（コンプリヘンシブ、つまり総合試験）がある。これは、心理学とか教育学といった自分の専攻と副専攻についてのかなり広い範囲からの出題と、もう一つは自分の専攻であるカウンセリングそのものの二本立てであった。なんと、それぞれ一日がかり八時間の試験だ。

しかし、今の私はプレリミナリーどころか、自分が履修している授業と助手としての仕事に全

力投球するのに精一杯だった。その上、プレリミナリーという予備試験と総合試験の準備、そして論文の計画などなどが押し寄せてきて、何をどうしたらいいかを見失っている自分を発見するのだった。

夜、下宿に帰って自分の今の状態を見直してみた。その結果、これまで日本で、トロントで、デトロイトで勉強してきた内容と、今これから勉強しようとしている内容との間に、大きな違いがあることに気がついた。コーネル大学へ来るまでは、一貫して対人援助の方法を中心にした勉強だった。それなのに、コーネルが求めるのは方法論ではなく、その源となる理論であることは明白だった。両者は似ているようだが、アプローチ的にも、目指すところも大きく違う。このことは、コーネルに来る前から感じていたことだった。しかし、アシスタントシップを下さったのが、コーネルしかなかったという現実があった。

迷いながら、自分の将来をどうするかを考えた。やはりツルーディーにお願いして、彼女とキングの母校であるミシガン州立大学のカウンセリング心理学への転校を考えるのがベストだと思った。そして、ツルーディーの言葉、「ケン、決心したら出来るだけ早く連絡しなさいよ」を思い出した。「善は急げ」。モントゴメリー家に電話して、来年秋からミシガン州立大学に移り、カウンセリング心理学を専攻したい、それには助手の仕事が不可欠であることをお伝えした。「願書はケンの方で取り寄せなさい。そして、アシスタントシップの申し込みを願書と一緒にやりなさい。私は、私の恩師ジョンソン教授に、ケンには助手の口が絶対に必要であることを頼んでおくから」と言ってくださった。

時は一九五九年一〇月末、秋学期が始まったところだ。今から申し込めば、そして有力教授の

援護射撃があれば、助手の口を戴けるかもしれない。それが駄目な時は、残念だけど「本国送還」だ。

## 4　転校の準備

来年、ミシガン州立大学に転校してから役に立つコースをコーネル大学にいるときから履修することが大切だと考えた。まず、ブロンフェンブレナー先生の調査の授業は世界中どこの大学院にゆこうと、博士論文を書くため、極めて大切な講義である。リチュティ先生の統計学も同様である。博士論文には統計の基礎知識が不可欠だ。ダルトン先生の授業は大学生向けであるが、精神分析、来談者中心療法、行動理論は臨床家には絶対不可欠な知識である。私が助手としての仕事をする上で、中心的な理論と知識でもあった。したがって、今学期私が出席している講義は全て、コーネルにいても、ミシガン州立大学に移っても必要な授業であった。

ここの授業を一生懸命に勉強することが転校の準備である。そう考えると、コーネル大学の勉強にも身が入る。調査と統計を勉強しておけば、ミシガン州立大学に移ろうと、関学へ帰ろうと、大学の教員として生きてゆくのに大いに役立つだろう。

コーネル大学在学中の一年間、キャンパス内のスタジアムから観衆のどよめきが聞こえてきても、私は下宿の部屋で机に向かい、博士論文の準備に励んだ。「あと二年半で、なんとしてでも博士の学位を取得して関学に帰りたい」。その思いが勉強に、残りの留学生活に、絶えずプレッシャーをかけてくれた。

## 5　一か八かで、突撃だ！

これまで、トロントでもデトロイトでも私がお習いしてきた先生方は臨床という援助実践のエキスパートで、大変失礼な表現だが調査という形の研究でご飯を食べている方々ではなかった。特に、デトロイトでは臨床の第一線で活躍している人々ばかりだった。これに対して、コーネルの先生方は調査研究でご飯を食べている人たちだ。その代表がブロンフェンブレナー先生であった。先生の調査のデザインとメソッドのコースでは、徹底的に実験デザインと客観的な調査と分析の方法を叩き込まれた。独立変数と従属変数といった調査の初歩的な考え方から始まって、さまざまなデザインとそれをどうやって実行するかを紹介して下さった。

ところが、私がミシガン州立大学へ移ってからやろうと考えていた博士論文のための調査は、AがBを好き、あるいは嫌い、といったポジティブ、あるいはネガティブな対人感情の有無と、AがBから好かれているか嫌われているかを予測し、その予測にはどんな対人認知の要素が関係しているかというソシオメトリック的なもので、原因と結果を解明するというよりは、二つあるいは三つの事象の間の関係とそれを被検者たちがどう知覚し、どう反応するかを予測して、その過程を解明するというレベルの試みであった。もちろん、それにはそれで意味がある調査だと私は思っていた。しかし、「コーネルではこんな調査は許してもらえない」というのが私の判断だった。

実は、一〇年ひと昔前まで、ブロンフェンブレナー先生も対人認知の研究でソシオメトリーを研究方法の一つに使っておられたのだ。しかし、それでは原因と結果という科学としての最低条件を満たすことができないという理由からだろう、研究方法としては発展の余地が少ないと思わ

れて、次第に因果関係を追求できる調査のデザインと方法に取り組まれるようになられたのである。その先生に、先生が駄目だとお捨てになったデザインを持ってゆき、これをやらせて下さいと言ったら、「とんでもない」と叱られるのが関の山だ。しかし、形こそ違うがトロントでも私はこのアプローチで修士論文を書き上げ、学年でベストの論文と評価して戴いた。この分野の文献研究のストックだけでなく、この領域に私は個人的な感情移入をしていたのである。そして、まだ入学も助手の採用も決まったわけではないが、ミシガン州立大学に移る途中の夏に、メリル・パーマーの子どものキャンプでパイロット・スタディをさせてもらい、その翌年には本番の調査をしたいと思っていた。

アメリカの大学院で一番良い博士論文の書き方は、主任教授のリサーチプロジェクトに入れてもらい、教授のデザインとメソッドで、あるいはそれを参考にしてデータを集め、その一部をもらって自分の論文を書くということだろう。だが、大勢の助手や院生がグループで調査と分析をしていると、どこかでポカが起きる。一人がこければ全員がこけるとまでは言わないが、多くのメンバーが一人の遅れの余波の影響を受けることが多い。この外にも、先生の出張、それも外国への出張は長くなりやすい。すると、学生の論文完成のスピードが落ちる。

関学の恩師たちからは、「博士の学位を取っても取らなくても、一九六二年の一〇月一日までには帰って来い」というご命令を受けていた。それが、関学が文部省の認可を受けた場合の私の着任デッドラインだった。これ以上遅れれば、社会学部は教員の欠員が生じてしまい、新設学部として大きな問題になることは必至であった。現在コーネル大学にいる私が、ミシガン州立大学に転校してから先生の調査グループに入れてもらっていたのでは、着任デッドラインまでに帰る

ことは不可能だ。ミシガン州立大学で私に与えられた期間は二年と数カ月。私は私の道を進むしかない。まさに"Going my way"だ。合言葉は、第二次世界大戦のヨーロッパ戦線で活躍した日系二世の第四四二連隊が使った"Go for broke!"だ。「一か八かで、突撃だ！」と私は自分に言い聞かせていた。

## XXII　ミシガン州立大学へ

### 1　さようならコーネル

春の学期が六月の中旬に終わると、大学は夏休みに入る。そこで、六月末で下宿を引き払い、デトロイトのモントゴメリー家に居候するお願いをした。ただ、あまり長期間では申しわけない。だから、博士論文の準備的におこなう予備調査ため、その夏、キャビンのリーダーとしてキャンプに置いてほしいと、メリル・パーマーのキャンプ長でもあるカウンセリング・センターのマシューズ先生にお願いした。私は、一年間、カウンセリングのインターンをしていたことがある。だから、「何時からでも来い」というお返事である。改めて、私のパイロット・スタディの計画書を先生にお送りして、キャンプ中、こんな調査を私のキャビンの子ども達にやりたいとお願いしたのだった。

さらばコーネルの日が来た。一年足らずだったが、お世話になったご家庭、とくに二人のお嬢さんとは辛い別れだった。前の晩から上のお嬢さんは泣くので困ってしまった。翌朝は、一家総出でお見送りである。淋しい気持ちもあるが、モントゴメリー家と古巣のメリル・パーマーに帰

ることはやっぱり嬉しい。

## 2　メリル・パーマー・キャンプ

夏の間滞在するメリル・パーマー・キャンプのディレクターであるマシューズ先生には「キャンプ前でも、先生のお供ならキャンプの用具係の仕事をやりますよ。でも、キャンプ中はキャビンのリーダーにして下さい」と念押しした。

博士論文のパイロット・スタディでは、キャビン内の子どもを一人ずつ呼んで、キャビン内の仲間に「好き・嫌い・中立」のどの感情を抱いているかを尋ねた。また、他の子どもから自分が「好き、嫌い、中立」のうち、どんな感情を抱かれているかを推測して言ってもらい、データを集める予行演習をさせてもらった。単純な対人感情とその想定ないし、知覚であるから、子ども達も面白がって協力してくれた。そして、いろいろ質問の仕方を工夫してみて、翌年夏のキャンプで最終版のデータを集めることができるだろうという一種の安心感のようなものを持てるようになった。

キャンプが始まる数日前から、マシューズ先生とご一緒にキャンプに行って、準備のお手伝いをした。昨年までは「メリル・パーマーのお偉い先生」という感じで接していたが、朝な夕な生活を共にし、キャンプ用具の点検をした。米国臨床心理学会の会長をしておられたお偉い先生が、キャンパーが到着する頃には、すっかり身近なキャンプ長になっていた。

## 3　メリル・パーマー・フットボール

キャンプも八月にはいると、ソフトボールは片付けられ、子ども用のやや小ぶりのフットボールの登場となった。プログラム・ディレクターとして、若い小学校の男の先生がやってきた。明るい、元気な青年で、八月からはフットボールシーズンだから、各キャビン対抗の年齢別タッチ・フットボールをしようと言い出した。そして、リーダーもキャンパーに交じってゲームに出るようにとのお達しである。

キャビン対抗の試合と聞いて、これは拙いことになったと思った。何故かと言うと、「キャンパー主体でなく、リーダー主体のプログラムになる危険性があるな」と感じたのだ。つまり、リーダーがある程度リーダーシップを発揮し、ボールを処理しないと、小学生の子ども任せではなかなかフットボールを楽しむという感じにはなり難い。この辺りのカウンセラーの役割が難しい。

私にとって、小学校の三・四年生というのはトロントで初めて実習で担当した時の子どもと同じ年齢だ。何が出来て、何が出来ないかという予想はできる。タッチ・フットボールだから、ボールを持って走ることも大事だが、パスを投げて進む方が効率的だ。だが、私がパスを投げても、小学校の三・四年生のキャンパーがボールを受けることが出来るかは大いに疑問である。特に、走りながらボールを受けるのは結構難しい。だから、私たちのグループでは「ボールを受けに行くキャンパーがある程度走ったら、止まって私の方を見る」といった感じのパスを多用した。また、私はボールを上から投げる時には超スローボールを、アンダースローの時には出来るだけ早いボールを投げるようにした。これならば、小学生でも捕球しやすい。

私たちのチームは、短いパス、それも下から投げるアンダーハンドのパスが主体の攻撃だから、

一回の攻撃では大して前へ進まない。しかし、四回の攻撃でじりじり進むので、相手は我々からボールを取り戻して、攻撃をする機会が回ってこない。パスの合間に、私からのボールをキャンパーが持って走るプレーで進むことも時々あった。誠に単純な攻撃だが、小学生でもやれることばかりだ。「塵（ちり）も積もれば、山となる」作戦だった。

進めばキャンパー達は大喜びだ。予想外の喜びはマシューズ先生だった。私たちのゲームプランは、大してパスを投げたり受けたり出来ない子ども達でも「やれるフットボール」だというお褒めの言葉を戴いた。そのお礼に、日本流にキャンパーを連れて先生のもとを訪れ、"Thank you"ではなく、"San kyu"と言わせてお辞儀をしたので、食堂全体に笑い声がコダマした。もっとも、このお陰でキャンプ場のあちこちで子どもたちから"San kyu"と声を掛けられるようになってしまった。

## 4　ミシガン州立大学では学生寮

コーネル大学でオフ・キャンパスに住んだ経験から、今度はキャンパス内の寮に住みたいと思っていた。私がミシガン州立大学へ移った年に、大学院生のための寮がオープンした。ただ、助手の仕事を戴けたとはいえ、家から仕送りがない身の上では贅沢はできない。したがって、院生寮はあきらめて、学部生の寮に入れて貰うことにした。キャンパスの中央に近い院生寮とちがい、学部生の寮はキャンパスの端っこにあり、私が助手をする教育学部の校舎からは随分離れている。当時寮費がいくらだったか、助手のお手当はどのくらいだったかは忘れてしまったが、決して裕福な学生生活ではなかった。日々倹約と、自らに言い聞かせていた。ただ、授業料は州外費免除

だったので、ミシガン州以外からくる学生の三分の一にしてもらえた。だから、寮に住む一般の学部生から見ると、私は大学の仕事をして給料をもらっているリッチな院生と映っていたかもしれない。

私が住んだアームストロング寮は、三階建ての建物がずらりと並ぶ、まさに寮団地といったところにあった。各フロアには三〇室ぐらいのツインルームがあったから、それぞれの寮には約二〇〇名前後の寮生が住んでいただろう。そして、こんな寮団地の真ん中に寮生用の巨大な食堂があった。

寮生活を始めて数日した時、通りがかりに何気なくお向かいや近くの部屋の中が目に入った。全てではないが、かなりの数の部屋はツインルームでシングルベッドが二つ並べてあるのだが、そのベッド上にもう一つずつベッドを置いてダブルバンクにしてあった。要するに、本来は二人部屋なのだが、入学生急増のため、慌てて四人部屋にしたのである。各部屋は定員が二名であるから、机もタンスも二つしかない。引き出しの半分を同室者で分け合うようにという寮長からのお達しである。ただし、このお達しが届くのは一年生、つまりフレッシュマンの部屋だけであって、私たちの部屋は大学院生と大学三年生だから、すし詰めの措置から逃れることが出来た。「やれやれ」である。

心配する私に、一年生の二人部屋に四人の学生が入る措置はこの秋期限りで、来学期はどの部屋も二人で使用することになるから心配無用と寮長は言った。「どういうことだ?」と、隣部屋の二年生に尋ねると、「冬休み中に大学からクリスマスカードが来て、そのなかに「貴方は成績不良につき、一月からは登校するにおよばず」という連絡があったら、その学生はもっと低いレ

ベルの大学へ転校して平均点を上げなければ、ミシガン州立大学には帰ってこられない」と言うのだった。

もっとも、全ての大学がこうしたやり方をしているわけではない。それぞれの大学が自分たちの学校に適した方法で学生の質の向上を考えている。

同じミシガン州の大学でも、世間ではナンバーワンと言われているミシガン大学は、全く逆の方針をとっている。彼らはできるだけ優秀な高校生を定員より少し多い数だけ入学させ、彼らが四年の間に脱落しないように勉強させ、できるだけ全員卒業させることを目指している。

どちらの方針がいいかは大学院生の私には分からない。多分、両大学の教職員に尋ねても本当の答えは分からないだろう。それぞれの大学の担当者は、自分達が長年やってきた方法がベストだと思っているから、あるいはベストだと思わなくても、長年やってきたシステムだから急に変えることはできないに違いない。

## 5　グラデュエイト・アシスタント

ミシガン州立大学に行くまで、モントゴメリー家で数日居候をしているとき、ツルーディーからミシガン州立大学での仕事に関する説明を受けた。彼女と夫キングの指導教授だったジョンソン先生は、学長代理の仕事が忙しく、教育の第一線で活動するのが難しいので、若いジョーダン准教授のアシスタントをすることになるということだった。私にとっては、アシスタントの仕事さえ戴ければ、どなたの助手でも不平不満など言える身分ではない。

ジョーダン先生の担当科目はStudent Personnel Work（SPW）で、生徒指導とか補導に関す

る授業だった。日本でも北米でも大学教員はそれぞれの学部に所属し、そこから他の学部に移ることは稀である。大学に就職したと言っても、現実は学部に就職したようなものである。一方、職員は関西学院という学校に就職したので、今は学生部にいるが、次に財務部や就職部、あるいはどこかの学部事務室に異動することも稀ではない。今、日本にいくつ大学があるか知らないが、全国の大学で実に大勢の職員が勤務しているに違いない。しかし、大学職員を養成する専攻を持つ大学は皆無だろう。ところが、五〇年前のミシガン州立大学の大学院には、学生部の幹部職員養成のＳＰＷという専攻があり、学生生徒の指導・補導・ガイダンスをおこなう専攻で修士の学位を取り、専門領域の知識を深め、それが昇進につながるシステムであった。同じ学生相手の専攻であっても、私が専攻するカウンセリング心理学は、臨床心理学との合併コースのようなもので、メリル・パーマー研究所で経験したことの線上にあった。そこでは精神分析、来談者中心療法、行動心理学を基盤に傾聴、共感、自己決定の尊重などを前面に押し出すのに対し、ＳＰＷは学生対策とか生徒補導という匂いがしないでもなかった。

それぞれの専攻を終えた院生の就職先だが、臨床心理やカウンセリング心理学専攻者は普通Ph. D.の学位をとり、多くは病院の精神科や大学のカウンセリング・センターに勤める。一方、ＳＰＷの専攻者で高校以下の教員なら学校内でより高い役職につくし、職員の場合は学生部のなかで専門的でより高い役職につく。ただ、私は米国のＳＰＷのシステム、内容、実践のことを全く知らない外国人大学院生なので、そんな科目の助手の働き口を与えられ頭を抱えてしまった。

ジョーダン先生はすこぶる「良い人」で、「ケン、米国のシステムが分かり難ければ、秋学期は僕のクラスに出て、どんな内容の講義でどんな質問が出るかを見ていれば、春学期には仕事が

出来るようになるから心配ない」と言って下さった。その頃は、アメリカの大学の授業料も今のように高くはなく、院生に対する援助も少なくなかった。今の高額の授業料に比べると、大学の「古き良き時代」だったのかもしれない。

## 6　ハロー統計学！

大昔、関学文学部の大学生の頃、今も中央芝生に面して建つ文学部の奥にある教室で統計学の授業を受けた時のことである。フットボールと子どものキャンプにうつつを抜かしていた私は、予習も復習もしていなかった。先生の講義が分かる筈がない。後に、その話をある学部の統計学の先生に告白すると、「あの先生の講義は分かり難いという評判でしたよ」と慰めて下さった。ただ、その統計学劣等生の私の心を統計学に引きつけ、心を開いてくださったのが、ミシガン州立大学のクランボルツ先生だった。ミネソタ大学始まって以来、最年少で博士号を取得したと聞いていた。多分、秀才面をしたホワイトカラー然の先生かと思いきや、ざっくばらんな人柄で、全く気取ったところのない人だった。この天才少年だった先生がどんな具合に統計学の分散分析法を教えるのか、不安とともに大きな期待が私の心のなかに芽生えてきた。それも、長年敵愾心を抱いてきた統計学に！

今の学生諸君には分からないだろうが、まだパーソナルコンピューターなんか発明されるずっと以前の話である。計算は全て筆算か、せいぜい電卓の赤ちゃんのようなモノしかない時代の話だ。でも、万一この笑い話のような原稿を読む学生、ないし院生がいたら、パソコンが生まれるずっと前から分散分析法なる統計の一種が存在していたという驚くべき事実だけは分かって戴き

たい。

北米のどこの大学でも同じようなシステムだと思うが、博士課程の院生は自分の日常の勉強から博士論文の作成審査までを指導してもらうために、四人か五人ぐらいの教授に指導委員になって戴く。私の場合、ジョーダン先生がチェアマンで残りがコミティーである。コミティーには、ジョンソン先生を筆頭に、統計学を教えて下さるクランボルツ先生にもなって戴いた。あとは心理学と社会福祉からお一人ずつだった。

クランボルツ先生の本来のご専攻は、当然、心理学である。ただ、この年は統計学の分散分析法を教える先生が有給休暇をとられていたので、先生が代わりにその講義を担当なさったのだ。私にとって、それが大きな幸いだった。関学で分散分析法を習ったときには、私の不勉強が原因でチンプンカンプンだった。しかし、この年は違った。自分の博士論文に必ず統計学を使わなくてはならない。どの統計を使うかはまだわからない。しかし、分散分析は大いにご厄介になる可能性がある。今の学生諸君が聞いたら信じられないだろうが、先生が黒板に書いた統計の式をノートに書き込み、授業が終わると電卓か、それに毛の生えたような計算機を使って計算をするという按配だ。私は決して算数の天才ではない。いや、中学部の数学のクラスでも並程度だった。ところが、ミシガン州立大学の大学院の統計学のクラスでは、私の計算能力は結構高いレベルのようだった。何度も言うが、前コンピューター時代である。幾つかある電卓もどきを奪い合いの末、獲得戦に敗れたら、暗算か、それが出来なければ筆算の世界である。残念ながら、私は子どもの頃、そろばん教室にいったこともなければ算数塾に通ったこともなかった。そろばん塾は近所にあったが、あれは商業学校へ進む子が行くところだと思っていた。だから、私の算術の能力は日

本の小学生、それもごく並のレベルか、それ以下だった。

ところがだ。アメリカの心理と教育の大学院のクラスで練習問題の計算をはじめると、この私の計算は結構早いし、正確だという評判になってしまった。その最大の理由は私が九九を知っていたからだ。問題を解くときに、「ニニンガシ、ニサンガロク」と口の中でぶつぶつ言いながら計算をする。ところが、アメリカの奴らは九九を知らない。だから、紙に書いてうだうだ筆算をやり、あげくの果てに計算間違いが起こる。クランボルツ先生も「お前たち、博士の学位をとったらこんな計算は院生の助手にさせたらいいから、計算するのは院生の今だけだ！」と諦めムードである。これではアメリカ人が計算上手になる筈はない。

こんな具合に、統計の宿題をやっている間に学期も終わりが近づいてきた。世界中どこの大学のクラスにも期末試験というしきたりがある。クランボルツ先生は、こうおっしゃった。「みんなこの教室に来て試験を受けるのだが、前もって試験の問題とやり方を言っておく。自分で問題を作り、その答えの出し方を家で準備してきて、それを試験当日この教室で書いて、提出するというのはどうだ？」。嫌も応もない。何だか知らないが、家で準備したものを持ってきて、試験場で答案用紙に書き写せばいいだけか。それは簡単、先生も案外話が分かるな。思ったより彼は良い人だったのだ。先生はさらに言葉を続けた。「採点の基準は、分散分析のデザインの複雑さで決める。三次元のデザインならばA、二次元ならばBだ」と。講義が終わって教室を出る時、先生は私に「ケン、三次元を考えろよ」と言われた。先生にそうおっしゃられると、日本人の私には義理がたい気持ちが発生する。「よーし、なんとか三次元を考えよう」と思うのだが、考えても、考えても、そんな難しいデザインは画けない。一週間頑張ったが、とうとう最も複雑な二

次元のデザインしか提出できなかった。答案を回収にいらした先生に「三次元はできませんでした」と申し上げると、「ケン、君ならやれると思ったけどな」と残念そうに言って下さった。

それから数日後、先生からの呼び出しがあった。おそるおそる出頭すると、「ケン、悪いニュースだ。僕は秋からスタンフォード大学へ移ることになった。君のコミティーとして一番大事な時にいなくなって、ゴメン。あとは教育心理のクラスウォール先生に頼んでおくがいいか?」。クラスウォール先生は、米国教育心理学会誌の編集長をしている大物教授である。「本当ですか?」と言う私に、「君は今学期頑張ってくれたから、僕の最後のプレゼントだ」と言ってニッコリ笑って下さった。

米国の多くの大学には、年齢による教員の定年はない。クランボルツ先生は、つい何年か前までスタンフォード大学の教授をしておられたのだが、この原稿を書くのでインターネットでチェックしたら、さすがに先生のお名前は現役教員のリストのなかには発見できなかった。大学のお仕事はお辞めになっても、先生がご健在でおられることをお祈りしている。

ある日、クラスウォール先生からの呼び出しがあったので、おそるおそる研究室に行くと、私が書いた答案が読み難いので「助けてくれ、ゴメンね」とおっしゃる。申し訳ないのは私の方だ。でも、これがきっかけで先生と親しくなれたという副産物があった。

## 7　私設散髪屋

寮のルームメイトはルイ・ミラーというミシガン州の北の端の州立短期大学から編入してきた地質学専攻の三年生だった。ご両親はともに高校の先生で、ルイ自身も大学を出たら高校の先生

になることを希望している真面目でおとなしい青年だった。短大では、はじめ散髪屋さんになるコースに入っていたという。

金曜日の午後遅くになると、ルイは寮のシャワールームで私設散髪屋を開業した。なんと散髪を頼んでくるのは全員黒人学生である。お客さんは次から次へやって来て、シャワールームが溢れそうになるので、私が整理券を作ってあげたくらいの繁盛ぶりだった。始めはただアルバイトで散髪をしていると思っていたが、黒人学生は街の散髪屋に行っても髪を刈って貰えないという信じられない事情というか、現実があることが私にも分かってきた。

時は大学で授業が始まったばかりの一九六〇年九月、隔週土曜日に大学のスタジアムではアメリカンフットボールの試合があり、黒人選手が大活躍をしているキャンパス・タウンでの話である。散髪屋の両隣の洋服屋でも靴屋でも、ショーウィンドウには黒人の有力選手の大きな顔写真が飾られている。その二つの店に挟まれた散髪屋が黒人学生の散髪を拒否するのであった。それで、寮のシャワールームで我がルームメイトが大忙しになるという次第である。

私は少なからずショックを受けた。南部の田舎町での話ならば分からないでもない。だけど、ここは米国の一番北の端のミシガン州にあるキャンパス・タウンだ。こんな人種的偏見行為がまかり通っていいのだろうかと大いに憤慨する。しかし、私の力では如何することも出来なかった。

## 8　ミシガン州立大学の日本人先生

アナーバーにあるミシガン大学は有名校で、日本人に限らず世界中から大勢の留学生が集まってきていた。大学の中には多くの研究所があり、外国からの研究者がそうした機関を訪れ、帰国

後、ミシガン大学のすごさを伝えたことがＰＲになったのではないだろうか。その結果、ミシガン大学には日本人学生が大勢来るので、日本人ばかりと付き合うことになるといった噂が立ち始めたようだ。そんなこともあって、イーストランシングにあるミシガン州立大学でも、日本人留学生が少しずつ増え始めていた。ちょうど、私費によるアメリカ留学が許され始めた頃だった。

そうは言っても、一九六〇年頃に来た日本人はまだまだ「はしり」だったと思う。また、われわれ留学生よりもっともっと前から日本人の先生方がこの大学で教えておられたのである。日本からいらした方も、ここでご紹介するクマタ先生のように米国で生まれ育った方もおられた。私が特に親しくして戴いたクマタ先生は西部のワシントン州のお生まれで、太平洋戦争中はご両親とご一緒に強制収容所に入れられ、そこから第二次世界大戦に志願され、兵士として南太平洋から沖縄、そして最後は関学の近くの伊丹空軍基地（現伊丹空港）に進駐軍の一人として駐屯しておられた。

占領下の伊丹基地といえば、その昔、関学中学部に三年間ジュニア・ミッショナリー（Ｊ３）として来ておられたポーター先生が、相棒のジョンソン先生と一緒に出かけていって、フットボールの防具を長期間無断借用してきて下さったところである（武田建「宣教師とＫＧファイターズ（前編）」『学院史編纂室便り』第五〇号、二〇一九年一〇月二五日、三頁）。日系二世の奥様がどうして伊丹基地の付近に住んでいらしたのかは知らないが、お二人は伊丹基地で出会われたそうだ。お二人にすれば、自分たちが出会った伊丹基地のことを知っている日本人学生ということで私に親しみを感じ、お付合いが始まり、それはお二人が天に召されるまで続いた。

私たち夫婦がご主人のクマタ先生に最後にお会いしたのは一九八〇年前後だったと思う。先生

はガンを患っておられたが、ご親戚や友人に別れを告げるため病を押して日本にいらしたのだった。ある秋の夕方、梅田のホテル阪神にお泊りの先生から「今、ホテルにいる」というお電話をいただいた。先生にお目にかかれる最後の機会かもしれない。書きかけの原稿をそのままにして、すぐに夫婦で飛び出した。

日本人教職員と家族そして留学生が湖の岸辺でピクニックをやり、ソフトボールをはじめ様々な球技を楽しみ、バーベキューをして食べたり飲んだり日本の歌を唄ったりした頃のミシガン州立大学日本人会の話、その頃まだ子どもだった二人のお嬢様が、お一人は結婚なさり、もうお一人は立派なプロフェッショナルとして活躍しておられるというご家族の消息、我が家の家族と関学フットボールの情報。でも、今振り返ると、話の内容は何でもよかったような気がする。お互いに顔には出さなかったが、この世でお会い出来るのはこれが最後であることは分かっていた。

別れの時が来た。握手だけでは物足りない、男同士ハグして抱き合った。そして、ホテルの入口に立って我々を見送って下さるお二人に、曲がり角で振り返り、日本流に深々と頭を下げ、もう一度最後のお別れをしたのだった。

## 9　甲南大出身の名田祐介さん

関学の学部と修士課程にいた六年間、神戸ＹＭＣＡの余島キャンプのリーダーをしていたことは何度も書いた。その時、私よりもいくつか下の学年に、甲南大学の名田祐介君という学生リーダーがいた。子ども達と一緒に寝泊まりするキャビンのリーダーもしたが、対岸の町に買い出しに行ったり、売店の手伝いもする万能屋さんだった。卒業後、パッケージング、つまり包装、あ

るいは梱包の会社に勤めたということはキャンプ長の今井先生からの便りでうかがっていた。その名田君が会社から派遣されてミシガン州立大学の包装学部（broadcasting の放送学部ではありません packaging です）の修士課程に勉強に来ていたのだ。彼は、日本人で初めて包装学で修士の学位を取得する大学院生だった。私が院生助手として働く教育学部は高層ビルで、いかにも近代建築風の建物だったが、包装学部はビルどころか第二次世界大戦時代に使い古したカマボコ兵舎で授業をやり、実験を繰り返していた。時々、夜の九時を過ぎた頃、私が寮へ帰る途中に梱包学部の小屋を覗くと、名田さんが汗を拭きふき、まだ実験をしている姿があった。私が実験室に入ると、気の優しい彼は実験の手を休め、飲み物の用意をしたりする。だから、大抵の場合、建物の外から窓を割らない程度の力でコンコンと叩いて合図を送り、「ハロー」と言って手を振るだけのノンバーバルのコミュニケーションでご勘弁願うことが多かった。

彼の修士論文は、私の一方的な理解だと、何種類かの大きさと重さのパッケージを五メートルとか、一〇メートルといった幾つかの高さから、何回ぐらい落とすまで梱包が壊れないかという実験研究だった。しかし、私が見た彼の実験は、梱包を実際に高いところから落とすのではなく、落とした時と同じ衝撃を与えることが出来る実験装置を使っていた。それはそうだろう、実際に、一〇メートルの高さに、いちいち梱包した荷物を持って上がって落としていたら、実験が終わるまでにくたくたになってしまう。

彼は、甲南大学でバドミントンの同好会にはいっていたと思う。だから、なかなかバドミントンが上手で、ミシガン州立大学でも、週末に日本人学生のレクリエーションのため、コートを予約して親睦バドミントンの集いを開いていた。また、日本人留学生の代表として大学全体の留学

生会の副会長を務めていた。彼のイニシアティブで、全世界から集まってきた留学生の出し物を披露する発表会を大学の講堂で開き、大勢のお客様からやんやの喝采が送られたことがある。彼の命令で、会の終わりに私が例のウクレレを片手に登壇し、出演した留学生グループと観客が一緒になって「お別れ」の歌を唄い、「来年会いましょう」と名残りを惜しんだのだった。（写真1）

## 10　タニタの剛一さんと計さん

日本で学生時代から一緒にキャンプ・リーダーをしていた名田さんは別として、ミシガン州立大学の日本人学生で、今もクリスマスレターを交換し、お付合いが続いている筆頭が谷田剛一さん、計（ケイ）さんご夫妻だ。

剛一さんのお父上は、建材関係と無線電機関係の二つの会社を経営しておられた。そして、ご長男の剛一さんが建材関係の会社をお継ぎになり、今のタニタハウジングウェアへと発展させた。一方、剛一さんの弟さんとそのご家族は、谷田無線電機製作所をお継ぎになり、ハカリやタニタ食堂で有名にになった会社を経営しておられる。

私が関学の教員時代、父から譲り受けた家が古くなって建て替えをしたとき、剛一さんの会社で作った銅の樋（とい）が建築現場に到着したのを見て大喜びをしたことを想い出だす。

谷田さんご夫婦はお二人とも立教大学ご出身、それも確か、立教の男子中学と女子中学からという生粋の立教カップルだった。私の母方の祖父は、明治時代のクリスチャンドクターだった。だから立教女子出身の叔母たちからよく立教の話を聞かされた。

私が大学三年生だった一九五二年、甲子園ボウルでドナルド・オークスという宣教師の率いる

立教に手も足も出ず、〇対二〇で完敗した情けない想い出もある。そのオークス先生が敵チームの下手くそクォーターバックだった私に、「こうすればお前は、もっと良い選手になれる」と教えて下さった。そのお陰で、私が四年生の時、甲子園ボウルで三年振りに立教にリベンジを果たすことが出来た。オークス先生の教えのお陰だと、今でも感謝している。

そんな私の背景があったせいかもしれない。谷田ご夫妻とは気が合うというか、お二人とご一緒だと、いつも話が弾んで楽しいと感じるのだった。日本人学生ほぼ全員でミシガン州立大学のフットボールの試合を応援にいったとき、ご一緒に座って試合の流れを説明させて戴いたこともあった。

最後の年には、谷田ご夫妻は大学の既婚学生用の宿舎群の中で、私のトロント時代からの親友、グッドマン夫妻と偶然同じ棟にお引っ越しになった。そんなことから、タニタ・グッドマン・タケダという親しい国際隣組ができあがった。その交わりは、谷田家が日本に、グッドマン家がカナダに帰った後も続いた。一九九〇年代の半ばにマーヴを客員教授として関学社会学部の大学院へ招いた時、タニタご夫妻と久しぶりの再開を果たし、両カップルが大喜びをした時のことを想い出す。

互いに二〇代の若き日に米国へ留学し、お金の乏しい時もあった、勉強で苦しめられたこともあった。剛一さんは大学院ではなくて、経済学部の学部生として入学なさっていた。人数の少ない大学院と違って、学生数の多い経済学部で外国人学生が卒業に必要な単位を取得するのは難しい。剛一さん、ホンマによう頑張りましたね。計さん、内助の功ありました！

あれから半世紀余りという長い年月が流れ、天国へ召される日が近づいてきた今、ミシガン州

立大学時代を振り返り、その頃異国で出会い、結んだ友情が今も続いていることを不思議な気持ちで噛みしめながら、そうした交わりをお与えて下さった神さまに感謝せずにはいられない。

## 11　コスガ家具の御曹司「康さん」

関学出の私がミシガン州立大学で親しくした日本人学生の筆頭は甲南、立教、そして次は慶應である。私は少々広場恐怖症の傾向があるのかもしれない。余り広々としたところは恐怖とまではいかないが、何となくその広さが気になる。あるいは、恐怖と言うよりも「気が散る」と申し上げる方が適切かもしれない。したがって、大きな図書館にはちょっとだけだが苦手意識がある。もちろん、本は大学図書館でなくても、心理学部や教育学部の図書室に行けばあるものが多い。しかし、全ての学術雑誌を置いているわけではない。だから、時々大きな図書館に文献探しに行くと、決まって大きな机の前に陣取って勉強をしている東洋人男性がいた。それが慶應義塾ご出身の小菅康正さんだった。端正な顔立ち、きちんとした服装、いかにも「慶應ボーイここにあり」といった感じだった。

小菅さんは、ミシガン州立大学が誇るビジネススクールの院生だった。ここのビジネススクールは評判が良いだけに、結構タフなプログラムだと聞いていた。関学の先生のなかでは商学部にいらした宮本寛爾先生がここでＭＢＡの学位を取得しておられる。

関学の建物のほとんどは、竹中工務店に建築をお願いしているが、そこの竹中統一社長も、ここでＭＢＡの学位を取得されている。社長はいつも謙遜なさって、「私がＭＢＡの学位を取れたのは宮本先生のお陰です」とおっしゃるが、アメリカの名門ビジネススクールの学位を努力と涙

なしには取得することは出来ない。

勉強家の小菅さんのお家は、文久二年以来続いている家具会社で、康さんが何代目かは知らないが、後に社長になられた方である。戦後、お父上が対米輸出を始められ、語学と米国流のビジネス手法の習得の必要性をお感じになり、ご長男の康さんに「ミシガン州立大学に行って勉強してこい」と送り出されたのだろう。そんなことを知らない私は、未来の社長を極めて気軽に「康さん」「康さん」と呼ばせて戴いていたのである。

二世、あるいは三世の代議士が若い頃、米国に遊学し、日本に帰ると「〇〇大学に留学していました」と、選挙の時の履歴に書く。しかし、私に言わせれば、学んだ大学の学位を取得してこそ初めて留学と言えるので、わが国の総理大臣や副総理大臣のアメリカ行きは、留学ではなく遊学に過ぎない。ここで紹介した方々は、皆さんそれぞれ必死に勉強し、目指した学位をきちんとお取りになったことを、改めて付け加えておきたい。

## 12　国連というニックネーム

私の住むアームストロング寮で、大学院生は寮長と私だけだ。特に、私は博士課程の院生で三〇歳であった。「おっさん」の定義が何かよく知らないが、学部生から見ると、三〇歳を過ぎれば確実にそのカテゴリーに入るだろう。あるいは、二五歳ぐらいでも、一八歳の一年生から見れば、立派な「おっさん」かもしれない。ただ、私たち東洋人は欧米の人に比べると、かなり若く見られる。だから、いちがいに実年齢だけで決めることはできないと、自分に都合の良い理屈を常に前面に押し出している。

私たちの部屋は、アームストロング寮一階の一番端っこ、つまり出入り口の手前にあった。入寮の時、院生である私は、ある程度どの部屋が良いか注文をつけることができたようだ。しかし、別に注文をつけなかったお陰で、一階の出入り口に最も近い部屋で、勉強家のルイというルームメイトに恵まれた。お向かいの部屋には、ミシガン州のカラマズーからきているプレストンという黒人の二年生と、小学校から高校まで飛び級で上がってきて一六歳でここに入学した秀才、ニューヨーク・ジュー（ニューヨークのユダヤ人）のマイクがいた。そして、私のルームメイトは、何度も紹介した白人の三年生ルイで、金曜日に私的散髪屋さんを開業する特技の持ち主であった。白人、黒人、ユダヤ人、そして日本人が一階の出入り口に住んでいるので、いつの間にか、我々四人は「国連」（United Nations）というニックネームを貰ってしまった。（写真2）

## 13　寮生活

私たち寮生は、一日に三度、寮団地の中央にある巨大な食堂に行って食事をする。ここの寮の食事はトロント大学の寮のそれに比べるとかなり低いレベルだと思う。しかし、毎日三食、ここで食べていると、舌がその味とレベルに慣れてくる。もちろん、アメリカ人の学生だって、はじめはお母さんの手料理と比べて「不味い」のなんのと文句を言っているが、二～三カ月も経たないうちに寮の食事に「馴れてくる」とは言わないが、「我慢」ないし「適応」してくるようだ。この場合、「適応」というのは「まあ、食べられる」と思うようになるという定義にしておこう。自分の家がキャンパスから車で数時間といった学生の中には、週末にお袋の味を食べに帰り、数日分の食料を持ち帰ってルームメイトに分ける殊勝な寮生もいないでもない。しかし、時間の経

過とともに、我が家に帰る頻度は減り、寮の食事の味を肯定はしなくても、「寮の食事とはこんなものだ」と諦め、受け入れるようになってくる。

家に帰って親に甘えられない学生は、別の方法で自分たちのフラストレーションを発散する。当時、アメリカの多くの大学の寮食堂では、カナダの大学のようにガウンを着ろとは言わなくても「夕食時にはジャケットとネクタイ着用」という規則があった。それに対する寮生、特に一年生の反応は、どこの大学のどこの寮でも同じようなものだった。ネクタイを鉢巻のように額の周りに巻きつける、上着を後ろ前に着る、裏返しに着るといった、一〇代のちょっとしたアクティング・アウト（権威に対する反抗・反発）が食堂の開門を待つ寮生の列のなかで表現されるのだった。

金曜日の夕食はどこの寮でも魚が出るのが習わしのようだ。私はプロテスタントの家に生まれ、プロテスタントの関西学院に通い、そこで定年まで働いたので、カトリックの文化に触れる機会はなかった。しかし、北米のどこの大学寮でも、金曜日の夕食のおかずは魚だ。その理由は、カトリックでは金曜日に肉を食べてはいけないという教えがあるからだそうだ。

トロント時代、私はカナダ合同教会の神学生の寮に入っていたが、金曜日の夕食は魚だったと聞く。実は、トロント大学の二年間、私は金曜日の夕方は社会福祉施設で実習があったので、寮の夕食に戻れなかった。しかし、金曜日の夜にはしっかり魚が出ると聞いていたので、密かに「しめしめ」と思っていた。だから、ミシガン州立大学では、学部のライブラリーで論文に必要な文献を探すため、寮の食事は失礼して近くにある大学院の寮で食べることにしていた。大学院の寮はカフェテリア形式だから、料金を払えば自分の好きなものを自由に選ぶことが出来る。私にとっ

てそれは週に一度の贅沢だった。

## 14　「日曜日はダメよ」

寮の食堂は、日曜日の夕方は閉まってしまう。コックさんや食堂のスタッフにお休みをあげないといけないという理由だそうだ。文句を言う代わりに、寮生に週一度、学外で食事する機会を与える意気な計らいと思えば良いというものだ。

我々学生寮の「国連」四人組は、第一日曜日にはキャンパス・タウンの中でベストと学生たちが言うイタリアンに行くことにしていた。しかし、日曜日の夕方は多くの寮生が食べにくるので、相当早めに行かなくては席がとれない。したがって、四時半か、遅くても五時前に夕飯ということも少なくなかった。

食事の時間が早ければ、夜には当然お腹が減る。そんな時には母が送ってくれた創世期の日清チキンラーメンの出番である。別に私が頼んだわけではないが、「日本ではこんな食べ物が出来たよ」と送ってくれるようになったのだ。まず、どうやって食べるかをルームメイトのルイと相談した。寮の中では、料理は一切禁止である。だから、誰かにあげようかと思っていたら、私の持っている大学のマーク付きのビールジョッキの中でお湯を沸かす電気コイルをルイが家から持ってきてくれた。これで熱湯は確保できる。あとは一袋の半分をジョッキに入れ、出来上がりを待つだけだ。問題は、「部屋での料理禁止」という寮の規則である。ルイと話し合った結果、実物を持って寮長のところを訪れ、事情を説明することにした。「ジョッキの中の熱いお湯にラーメンをつけるのを『料理している』とあなたが判断すれば、このヌードルはゴミ箱に処分する」と現物を

一袋持って相談に行った。アフリカからの留学生である寮長は、「郷里の母親が送ってくれた食べ物を息子が食べることができないというのは悲劇だ」と言ってくれた。熱湯を沸かすことは別に規則違反ではないし、それに麺をつけるのを料理したとは言えないという大岡裁きを下してくれた。喜び勇んで部屋へ帰った我々は、お向かいの国連二人組を呼び、真冬の寒い夜に窓を大きく開け、ドアの下の隙間にバスタオルをかまし、交代でお湯を沸かしてはインスタント・ラーメンをジョッキに入れては食べ、温めては食べして飢えをしのいだ。国連軍が飢えた難民に食べ物を贈ったらこんな状態だろうと言いながら、カップヌードルを貪ったのも、今になると懐かしい想い出である。

## 15　ワイワイコーラス

日曜日の午後、勉強を始める前に、寮の国連四人組がキャンプソングかフォークソングか知らないが、歌らしきものを唄っていると、その輪はだんだん大きくなって、一〇人余りが小さな部屋のベッドの上や床の上に座り込んで、それぞれが持ってきたギターやバンジョーを弾きながら、大声でアメリカのポピュラーソングをはじめ、様々なジャンルの歌を唄い始めた。

歌っている我々は良いのだが、近くの部屋には日曜午後でも勉強する変人もいれば、昼寝中の怠け者もいる。みだりに大きな声を出すのも、大声で歌を唄うのも、寮の規則に触れる行為である。かといって、折角盛り上がった雰囲気なので、「止めろ、出て行け」とは言いにくい。寮長が歌声を咎めに来る前に、「室内のシング・ソングは三〇分間で止めよう」と、部屋の大家として宣言しておいた。

三〇分たったら、我々の部屋を出て、寮の中庭の芝生の上で歌い始めたグループにわれわれ国連軍は出兵しなかった。しかし、そのグループは一大音楽勢力に発展し、クリスマス前には、寮対抗のコーラス合戦に出る「グリークラブ」にまで成長していた。

彼らにとって一番の晴れ舞台は、クリスマス・ソングを準備して、夜女子寮を訪れ、その窓の下で歌っていた時かもしれない。窓からブラやパンティーが飛んできたと言う。嘘か誠か知らないが、そんな噂もキャンパス内でまことしやかに流れてきた。ただその頃、我々国連軍は期末試験に追われ、残念ながら歌どころではなかった。

## 16　最後の年のアルバイト

ミシガン州立大学での一年目は良いスタートが切れた。大学院の授業も結構楽しかったし、教授たちとも良好な人間関係を築くことができた。一番気がかりだったのは、翌年の仕事がなかなか見つからないことだった。大学のアシスタントの仕事は、一年限りという不文律があった。ジョンソン先生に相談に行くと、「助手の一年間ルールがあるので困ったな」と頭を抱えておられる。学生の入る寮長とそのアシスタントの仕事がないかと寮長たちを訪ねたが、彼らのやるべき仕事は必ずしもカウンセリング専攻の私たちの好きなアプローチとは言えず、困ってしまった。

そんなこんなで、またまた「困った時のモントゴメリー家頼み」、つまり援軍要請だ。ツルーディーに泣きつくと、彼女が院生時代の親しい仲間がミシガン州立大学のカウンセリング・センターのテスティング・ルーム長をしているから、電話してみるとおっしゃって下さった。

翌日、「カウンセリング・センターのグエン・ノレル先生を訪ねてごらん」とツルーディーか

ら電話があった。ただ、私は関学へ帰ったら、教育学科でなく、社会福祉の学科に採用される身分であるから、ロールシャッハとかＴＡＴといった投影法のテストは必ずしも得意な領域ではなかった。ツルーディーは、そのへんのことも上手にノレル先生に話しておいて下さったようだ。ノレル先生は、ご自分が室長をしておられるテスティング・ルーム、つまり心理検査室のハーフタイムのアシスタント・インストラクターという資格で、月給三〇〇ドルという条件ではどうかと言ってくださった。どうもこうもない。「今の私のお給料よりもはるかに良い条件です」とお礼を申し上げ、寮に戻ってすぐにツルーディーとキングに仕事が決まったことをご報告し、感謝したのだった。

ミシガン州立大学への転校から終了までの二年間余り、私が好条件の仕事を戴け、学業を続けることができ、最終的に博士の学位を取得できたのはモントゴメリー先生ご夫妻のお陰以外なにものでもない。このお二人には、どんなに感謝してもしきれないほどお世話になった。

実はそれだけではない、関学の教員になって五年が経ったときに、初めてアメリカで生活をする我が家の女王様をはじめ、二人の子どもを連れ一家四人で一年間メリル・パーマー研究所でポストドクターの臨床訓練を受けにいった時も、すっかりご厄介になった。我が家の子どもが二人とも、後にアメリカに留学するようになったのもモントゴメリー家の影響が大きかったと感謝している。

## 17　カウンセリング・センター

私が戴いたカウンセリング・センターでの仕事というのは、センターのカウンセラー（センター

専任で、教授･准教授というポジションを持っている）や、さまざまな機関や本人の依頼に応じ、知能検査をはじめ、各種の性格検査や適性検査などをおこなうことだった。蛇足だが、知能検査には読者もご存じの、ビネー式やウェックスラーというテスターが被検者と一対一で行うテストがあるし､性格検査にもロールシャッハとかＴＡＴといった個人で受けるテストがある。しかし、そうしたテストを個人に行うには結構長い時間と手間がかかる。そこで、第一次、あるいは第二次世界大戦時のように、急に大勢の若者を軍隊に動員する必要が生じた時、将校にする者と一兵卒にする者とを「すぐに」分けるため、大勢の人に一斉に実施出来る各種の心理テストが考案されたのだ。いつの間にか、その流れが大学のカウンセリング・センターにも押し寄せてきて、個人でやるテストはカウンセラーがやり、大勢の学生にいっぺんに行う集団検査はテスティング・ルームでやるといった具合に分業されてきた。そして、この私が、テスティング・ルームでその仕事の一部を頂戴したというわけである。

採用時には、心理学専攻後期課程在学者という条件を付けて採用して戴いたが、実際にはそんなに高度な知識も技術はいらない仕事だった。ただ、被検者から質問などが出た場合、いろいろ説明するにはそれなりの臨床心理の知識が必要であった。

テスティング・ルームには男女二人のフルタイムのスタッフがすでにいたので、私のポジションはツルーディーがノレル室長への強い働きかけにより、少々無理に作って戴いたものだったのかもしれないと恐縮すると同時に感謝していた。

カウンセリング・センターでは午後三時なるとコーヒーブレイクがあった。かなり大きめの台所のような部屋で、スタッフがインスタントコーヒーを自分のカップに入れて飲むのだが、私は

コーヒー党ではないので、学校の近所のスーパーで売っているティーバッグ、それも最近見つけたグリーンティーのティーバッグでお茶を入れて飲んでいた。それを見て、スタッフから「ヤック」と言って変な顔をされたり、「そんなもん、よう飲むわ」と笑われた。もっとも私にすれば、「なんでコーヒーのような苦いものを皆は飲むのかな?」と、今もって不思議に思っている。緑色のティーバッグの味はそれほどでもなかったが、色は確かに日本茶の色だったので私のお気に入りだった。

## XXII　ミシガン州立大学での博士号取得

### 1　卒業のための試験

アメリカの大学院では、総合試験に受かってから、博士論文に取りかるのが通常である。だから、我々の言う総合試験を、博士論文を書き始める資格をもらう試験と呼ぶ大学も少なくない。しかし、資格試験にパスしてから論文にかかったのでは、「関学に帰ってこい」と命じられている一〇月一日のデッドラインに間に合わない。そこで、私は総合試験の準備に加えて、博士論文の計画の申請、申請の受理、調査の実施、データの分析、論文の仕上げをほぼ同時並行で行うという前代未聞のスケジュールに挑戦したのであった。

### 2　親友との共同戦線

一九六二年の四月から五月にかけて、二つの総合試験と博士論文の提出が重なり、「忙しい」

とはこういうことを言うのだろうと思い知らされた。

そんな時に助けになったのが、トロント時代からの親友マーヴ・グッドマンだった。私は、総合試験の準備内容を二つに分けた。彼と私が半分ずつ受け持ち、質問と解答を作り、それらを交換し合っていた。ただ、そそっかしい私のことだから、答えの中にとんでもない間違いがあった。一番傑作だったのは、被験体のサルの名前を人の名前と勘違いをしてしまったことだった。ようするに、サルにつけていた「サルタン王」というニックネームを人の名前だと思いこんでしまったのだ。紙面の関係で失敗は一つしか紹介できないが、この種の失敗は数々ござる。

気のいいマーヴは、その度に大笑いをして私のミスを訂正し、正解を書き込んでくれるのだった。なんのことはない、カナダから家庭教師に来て貰って卒業試験の準備をしているようなものだった。

こうして、二人三脚の片方の私の脚は、短い上に、骨折もしているような感じだったが、なんとかそれなりに試験日に向け、準備は進んでいった。

二つの総合試験はそれぞれ八時間である。朝八時に始まり、お昼休みが一時間、午後は一時から五時までだ。朝、事務所に行くと、当番に当たった女性職員から受験する院生一人ひとりに名前の書いてある封筒が渡される。その中にそれぞれの受験生のための試験問題がはいっているのだ。次に、今では信じられないだろうが、当時は電動タイプライターなんかない時代だから、ガタガタ音を立てるマニュアル（手動）・タイプライターで答案を書く受験生は、うるさいので別の部屋に入れられた。

総合試験の一つ目はカウンセリングと心理療法であるから、マーヴも私もちょっとばかり自信

があった。ただ、一週間後に行われた「一般」とか「ジェネラル」と呼ばれる心理学と教育学の試験は、領域を二つずつにしぼって貰ったが、それでもまだ私には広すぎてタフであった。

コーネル大学の所で白状した通り、心理学の中でも行動とか学習心理学といわれる領域は私の苦手な分野だった。試験の結果、案の定、行動心理学の出題者から「君の解答は落第させるほど悪くはない。しかし、このままパスさせるわけにはいかない。二週間後に口頭試問をする」という連絡が入った。心配したアドバイザーのジョーダン先生は、口頭試問に立ち会うとおっしゃった。「そんなことをして戴いていいのだろうか?」と、私の方が心配だった。

口頭試問は、ジョーダン先生の同席という援護射撃もあって、かろうじて合格にして戴いた。後は、博士論文の面接だけだ。

## 3　ああ、コンピューター

学科試験に比べると、博士論文は随分早くから準備して、パイロット・スタディをしてからデータ収集を行ってきたので、文献紹介やデータを集めることについてはあまり問題ないと思っていた。ただ、私が教えを乞う統計学の先生と前もって連絡が取れなかったという理由があったとはいえ、私が独走ぎみだったことが問題の発端となった。

データは夏の間に集めることが出来ていた。ただ、データの分析方法とその過程について、データを集める前に統計学の先生と十分な打ち合わせが出来ないまま、キャンプへ行って調査を行ったことが気がかりであった。私はキャンプ前に、幾つかの日取りと時間を統計学の先生にお届けしておいたのだが、先生の時間と私の時間が合わなかったようだ。そのため、データの分析方法

を先生と十分詰めることなく調査を始めざるを得なかった。秋になって、その集めたデータを持って先生のもとを訪れ、「データを集めました」と、小学生のような事を申し上げたのだった。

夏前に忙しかった先生は、私の調査の相談に十分に乗れなかったことを気にしていらしたのだろう。私の拙い調査の後始末的対応を上手にして下さった。そして、テトロコーリック・リレイションズという、私が見たことも聞いたこともないような統計手法で、私のデータ処理をコンピューターに指示してくださった。少なくともその時には、「後はコンピューターがしてくれる分析を基に、結論を書く作業だけだ」と思って、大喜びで先生にお礼を申し上げた。私に負けないくらい先生もお喜びくださった。

データは手元にある、統計的な処理方法も教えて戴けた。あとはコンピューターにそれを命令する「だけだ」。でも、「だけだ」と言っても、情けないが私にはどうやってコンピューターに命令していいのか分からない。プログラマーの出番である。年配の女性プログラマーは、私のデータと統計学の先生が示して下さった公式を親切にコンピューターにインプット、と言うのかどうか知らないが、「命令」して下さった。やれやれ、これでデータの分析手続きは一巻の終わりである。少なくともその予定であった。

ここまで見届けて、プログラマーはご主人とバーミューダ島での二週間の休暇に旅立たれた。

私のデータは、コンピューターセンターのアルバイト学生の手で長い紙テープに打ち込まれた。なにしろ、時は一九六二年である。コンピューターなるものがまだまだ珍しい時代であった。しかし、大学たるもの、超大型の計算機のような「コンピューター」と称する化け物を持っていなくては大学の名がすたる。でも、予算の都合か、外の経済的理由なのかどうか一院生の私には

分からないが、ミシガン州立大学の当時の「スーパー・コンピューター」なるものは、大学内の先生たちがその英知を結集して、自分たちの手でつくり上げた「自家製」であった。私はよく知らないがその能力は、今私たちが使っているデスクトップの何万分の一ぐらいの容量と能力しかなかったに違いない。

とにもかくにも、私が夏中キャンプの子どもから集めた「好きと嫌い」のデータを打ち込んだテープをコンピューターの口からお腹の中へと流し込んだ。「うまいこと分析してよ！」と、祈るような気持ちで私が見ている前で、データを打ち込んだテープをコンピューターセンターのスタッフが機械に入れてくれた。何がなんだか分からないが、涙が出る程嬉しかったし、それはなんとも言えない感激だった。

ところがだ。分析の結果が出てくるのを待っている私の目の前で、コンピューターは「ガー」とか「ギー」とか、何とも言えない「嫌な」音を立てて止まってしまった。あのアルバイトらしい若者が飛んできてボタンを押すと、コンピューターは黙って短いテープをお尻から吐き出した。彼は無言でそのテープを私に渡し翻訳機を指さした。言われた通りそのテープを翻訳機に通すと、出てきた答えは「間違いあり正せ」。何度読んでも答えは同じだ。アルバイトは気の毒そうに私を見ているが、彼を責めることは出来ない。彼にはなんの罪もない。プログラマーがバーミューダ島から帰るのを待つしか打つ手はないのだ。

翌日、クラスでこの話をすると、半分が同情、あと半分は大笑いして喜んだ。彼らの言い分は、「ケンは二年間で二つの総合試験にパスし、同時に論文を仕上げるという不届き千万なことをやろうとしている。だから彼がいつも話すメソジストの神様が戒めと警告を発して下さったのだ」と笑

う。だが、当の私は何を言われようと、ただ「泣きたい」気持ちだった。

## 4　総力結集

プログラマーが休暇から帰って来た。またたくまに私の問題は解消された。そして、分析結果を論文のなかに書き込むことが出来た。一方、博士論文を書くと言っても私の英語力では、正しい英文を書くことは難しい。テスティング・ルームの室長のノレル先生が心配して、「誰か論文の英語をチェックしてくれる人はいるの？」と尋ねて下さった。「自分の英語力では綺麗な正しい英語は書けないので、どうしたらいいか悩んでいるところです」と申し上げると、少々謝礼は高いかもしれないが、彼女の友人にやってくれないか尋ねてみるということだった。有難いことだ。これで英語のトラブルは解消だ。

次の関門は、論文の面接試験だ。でも、案ずるより産むはやすしとはこのことだった。筆記試験の時の難しさと苦しみに比べると、論文の面接試験では私が説明する側で、先生方は聞き役、つまり聴衆であった。一時間半がたった。先生方ひとりひとりが、「おめでとう、ドクター・タケダ」と握手して下さった。

こうして、多くの人たちの支えと努力と好意のお陰で、一九六二年六月末の卒業式になんとか間に合って、博士の学位を戴けることになった。

## 5　卒業式

寮に帰って、まずデトロイト郊外に住む、アメリカの両親ともいえるツルーディーとキングに

「博士論文の面接試験合格」の電話をした。お二人で電話に出てこられて、ご自分のことのように喜んで下さった。私は、このお二人にいくら感謝してもしきれないほど多くのお世話とお助けを戴いた。特に、コーネル大学からミシガン州立大学への転学、大学の助手の仕事の斡旋、カウンセリング・センターの仕事のお世話などなど、モントゴメリーご夫妻の絶えざるお支えがなければ、私はとっくの昔に本国送還になっていたことだろう。

卒様式は大学のフットボールグラウンドで行われると聞いていたので、少なからずワクワクしていた。しかし、雨の予報が出たのか、大学の講堂に変更になってしまった。このため、卒業生にとっては多くの親戚や友人などを呼ぶことが出来なくなり、その連絡で大変だったことだろう。卒業生は、全員キャンパス近くの貸衣装屋さんからの借り物の黒色のガウンの上に、学部や学位によって色が違うお坊さんが着る袈裟のようなフッドをつけて会場に入る。学長の式辞があったが何も覚えていない。何しろ五〇年以上も前のことだし、それにスピーチは英語だ。

会場の急遽変更のせいかもしれないが、壇上へあがって「仮卒業証書」という、ただの紙切れをくるくるっと巻いたものを学長様から直接戴けるのは、博士の学位を授与される者だけだった。あとは、総代の名前と人数と専攻がアナウンスされただけだった。なにしろ、マンモス大学の最上級生全員近くが卒業、あるいは修了するのである。何がなにやら分からないうちに名前を呼ばれて壇上にあがり、学長から仮学位記をちゃんと手渡されたことだけでも驚くべきことだと思う程の人数の卒業生だった。

帰国後、関学アメリカンフットボールのチームドクター杉本先生の親友で、西宮北口で小児科医院を開業なさった合瀬先生が、たまたま講堂のてっぺん近くで私が壇上にあがるのをご覧に

なっていたことを知った。世界中どこへ行こうと「壁に耳あり、障子に目あり」の格言通りだと思う。

式の終わった午後、テスティング・ルームのノレル先生のお宅で、親代わりのキングとツルーディーが私のためにカウンセリング・センターの仲間などを呼んで、お祝いのシャンパン・パーティーを開いて下さった。そして、お父さん役のキングが出席者お一人おひとりのグラスにシャンパンをついで回って下さった。このお二人に出会わなければ、私の人生はきっと別のコースをたどっていたに違いない。感謝してもしきれないご夫婦である。

## 6　私の就職先

この頃になると、カウンセリング・センターでは私の秋からの就職先が話題となった。つまり、博士の学位を貰った私がどこへ就職するかがちょっとした関心の的だった。「私は関学を通してカナダ合同教会の奨学金を与えられて、トロント大学に留学させて戴いた。その後、自分の勝手な希望でアメリカの大学院に進んだので、当然、関西学院に帰ることしか考えていなかった。しかし、カウンセリング・センターの人たちは別の考えを持っていたようだ。

彼らが問題にしたのは給料の額だった。大昔の話で、厳密な額など覚えていないが、センターのスタッフに私が話した関西学院のお給料は当時一ドルが三六〇円だったから月に一〇〇ドルぐらいだろうと言ったことに端を発したのだった。「お前はハーフタイムの院生の今でも月に三〇〇ドルを貰っている。これまでは院生のアルバイトだったが、ミシガン州立大学から博士の学位を授与されたのだ。アメリカの大学で教えるもよし、大学のカウンセリング・センターや病

院で臨床活動をすることも出来る。ここのセンター長に推薦状を書いて貰えばいろんな機関が採用してくれる。スタッフ・ラウンジの掲示板にもカウンセラー募集の広告が何枚も貼ってあるではないか。お前が勉強したトロントに出来たヨーク大学が今、カウンセラーを募集している。なぜ、そんな少ない給料の日本の大学へ帰るのだ」と集中攻撃を浴びせられた。それに対して、「自分は関学を通して奨学金を戴いた。母校に帰って教えるオブリゲーションがある」と反撃したが、そんなものは「給料からお金を返したら仕舞いだ」と言う。自分が関学へ帰って勤めないと、文部省の認可が取り消されるかもしれないと、ありとあらゆる理由を並べたが、相手は金額一点張りで攻めてきた。

## XXIV　帰国前に

### 1　北米最後のキャンプ

カウンセリング・センターでの仕事も終わった。ミシガン州立大学ともお別れだ。ただ、帰国の飛行機は論文の完成が遅れる可能性を考えて八月の末にしておいた。夏を何処でどうやって過ごそうかと考えた時、論文のデータを集めさせて戴いた、そしてお世話になったキングがキャンプ長をしているキャンプ・オークランドが浮かんだ。プログラム・ディレクターとしてもう一度行こう。昨年の夏は、汗水流して子どもの世話をしながら、プログラムの進行の責任の合間に論文のためのデータを集めるのに忙しかった。だが、今回は子どもの世話とプログラムの進行だけが私の役目だから、気分的には「のんびり」とした楽しいキャンプだった。

平和で静かだったキャンプ生活で、一つ大きな事件が起こった。食堂の屋根にクマンバチの大きな巣があったので、誰かが長いポールでつついてはたき落とした。それは結構なことだったが、はたき落としただけで、巣はそのまま草むらに放置されていた。そして、その被害がなんとこの私に降りかかってきたのだった。

食堂に続くオフィスに行った帰り、私はちょっと近道をしようと草むらを斜めに突っ切って歩いた。それがいけなかった。誰かが叩き落としたあのクマンバチの巣が草むらにずっと放置されていたのである。私の足で押しつぶされた巣の中には、まだかなりの数のクマンバチが残っていた。驚いた彼らはいっせいに巣をとび出し、その一部は巣をつぶした不届き者の脛に反撃を加えた。数は五匹か六匹だったが、それはそれは痛かった。そして、驚いた。

だが、その時、まだ私は敵の正体を十分知らなかったし、事態の深刻さも分かっていなかった。私はただハチの一種が襲ってきたぐらいに思っていた。だから、悠然と自分の脛についている「ムシ」を手で叩き落とし、平気な顔で食堂に続く保健室に薬を貰い行けたのだろう。「知らぬが仏」とはまさにこのことだ。私は看護士に「ハチに刺されました。薬を下さい」と笑顔でお願いした。何も事情を知らないナースは何か塗り薬を渡してくれたので、私はハチに刺されて赤く腫れてきている自分の脛のあちこちにクスリを塗り、丁寧にお礼を言って立ち去った。

しばらくすると、ナースが二人のカウンセラーを従えて走ってきた。「何かあったの？」と尋ねる私に、ナースは「ケン、貴方こそ大丈夫？」「貴方はクマンバチに刺されたのよ！」と言う。彼女の目は血走っていた。これはタダごとではないということは、その表情から分かった。「すぐ、町の病院へ行かなくては！」と言う。私は、まだ、事の重大さが分かっていなかった。しか

し、彼女の表情から「どうやら私の身体に大変なことが起こっているらしい」ということが段々と伝わってきた。

一緒について来た男子リーダーの車でナースに付き添われ病院に着いた。暫く、イマージェンシー、つまり「救急」と書いてある部屋で待っていると、ドクターがあたふたとやってきて、「クマンバチにやられたって?」と心配そうに尋ねる。「はい、一種のハチにさされました」と私が答えた途端に、「先生、ハチではありません。クマンバチです」とナースが訂正する。すると先生は「それは大変だ」と言って、直ぐに注射をして下さった。そして、処方箋を書いてナースに渡した。「もし、何か問題が起こったら、自分は今夜当直だからいつでも電話するなり、病院に来て下さい」とのことだった。

なぜか知らないが、私の痛みはキャンプにいた時以上には悪くなっていない。注射だけで十分だと思うが、病院に運んでくれた仲間の手前そうは言えない。ドラッグストアで処方された薬を渡され、すぐ飲むようナースに促され、水を貰って大急ぎで飲み込んだ。

私たちがキャンプに戻ったのは夕食の真っ最中だった。私の姿が食堂に現れると、全員が立って拍手をしてくれた。こんな時に何と言ったらいいのだろう。「サンキュウ、私はオールライト」くらいしか言えなかった。だが、それが良かったのか、また拍手が起こった。やれやれ。

飲み薬、塗り薬、冷やして、安静。これだけすればホーネット(英語でクマンバチのこと)であれ、クマンバチであれ大丈夫と思った私を見たキャンプのリーダーたちは、さすがサムライの国から来たリーダーだ、「強くて、冷静」と思ったようだ。夜、キングが教育委員会の仕事からキャンプに戻り、見舞いに来てくれた。その時にも腫れはあったが、痛みは少し減ってきていると言え

るまで回復していた。人騒がせの元凶はクマンバチか、それともこの私だろうか？

## 2　トロントへのセンチメンタル・ジャーニー

大昔、まだ私が中学部生ぐらいのときに、「センチメンタル・ジャーニー」（邦訳は「心の旅路」）という映画を見たような気がする。あるいは、誰かが見てきた話を聞いただけだったのかもしれない。ストーリーも俳優も思い出せない。ただ、映画の主題歌のメロディーは今も頭の片隅に残っている。私の「心の旅路」の出発点はなんといってもトロントだ。

私が二年間お世話になったバーウオッシュという寮から社会福祉の教室に行く最初の十字路に、名前は忘れたがちょっとしたホテルがあった。寮にも教室にも一番近い宿泊場所である。お別れ旅行の宿泊にはもってこいだ。電話で予約しておいたが、チェックインは午後三時。とりあえず荷物を預ける。ホテルから一番近い想い出の場所は、当然、社会福祉大学院だ。まず、親しくして戴いた図書館員のミセス・ギャレットソンにお目にかかりたいので図書室を訪ねた。そこにいたスタッフに尋ねると、「ご定年で退職なさった」ということだった。私がここの大学院を修了してから四年以上の時が経っていたのだ。

でも、予期せぬ素晴らしい再会もあった。私が大好きな、あのゴッドフリー先生が偶然研究室にいらしたことだ。私がノックすると、私が立っているのでびっくりなさり、「ケン、あなたここで何しているの？」と、親しみを込めたご質問。ミシガン州立大学の大学院が終わりました。博士の学位を戴けましたと、ご報告。"Good for you!"（おめでとう）。六年前に初めてカナダに、初めて外国の大学院にきて初めて出会ったプロフェッサー、それが先生でした。大学院には毎年

大勢の学生が入ってくる。その学生の中の一人にすぎない私のことを覚えていて下さったのだ。一言ご挨拶をと思っていたのが、結構長居をしてしまった。先生とハグしてお別れをした時、「次にお会いできるのは何時だろうか?」と思わずにいられなかった。

次の目的地は、一年生の時に実習をしたセッツルメントである。そこに行く途中、学生会館の中を通り、大きく広い公園の芝生の上を歩き、たくさんの大きな木々を眺め、州の議事堂の前に立って別れを惜しみ、やっと元実習先のセッツルメントにたどり着いた。会館の中に入ると、まずオフィスにゆき「六年前の実習生です」と自己紹介。スーパーバイザーと館長の名前を挙げたが、お二人とも外出中とのこと。馴染みのお顔は見当たらなかった。五年の間には多くの変化が起こるものだとしみじみ感じた。セッツルメントの近くの住宅の通りを歩きながら、この家には家庭訪問に来たぞ、ここの子どもは私のグループに来ていたな、等々昔の想い出に浸りながら、ちょっとした「心の旅路」であった。

晩ご飯は、一年生の授業が始まる前、寮の食堂が開いていない時によくいった「洋風&中華安食堂」に行こう。食後のデザートにそっとパイをプレゼントしてくれたウェイトレスの女の子がいたことは今も忘れていない。あの頃の私は、ほとんど英語が喋れなかった。留学生活一年目が始まる前の懐かしい想い出でに浸りながら味わった夕食だった。

### 3　バック・ツー・ミシガン州立大学

私の「北米よ、さようなら小旅行」もいよいよ終わりに近づいた。最後は振出しに戻ってイーストランシングである。当時のアメリカの大学の中で、東はコーネル大学、西はコロラド州のデ

ンバー大学、そしてミシガン州立大学にホテルとレストラン経営の学部があった。まだ、まだ、そういった応用部門の専攻を提供する大学が少ない時代だった。

ミシガン州立大学には、ホテル専攻生のための実習施設を兼ねた立派なホテルが学内にあった。私は一階のレストランにしか行ったことがなかった。だから、ここのホテルに泊まることを少なからず楽しみにしていた。

私がこのキャンパス・タウンに戻ってきたのは、大学のホテルの見学のためだったわけではない。親友のマーヴと奥さんのキャロルへのお別れと、生まれたばかりの彼らの赤ちゃんシャーンの顔を見に来たのだ。だが、夕食にはまだ時間がある。今は、マーヴが「夫婦と家族」に関する博士論文のアンケート調査を進めている時だ。夫婦者の学生の宿舎は一大被験者群である。彼が車を運転して、車が止まったら、直ぐに私がアパートまで走って行ってお礼を言ってアンケートを回収するというプロセスの繰り返しである。あとで、「マーヴは日本人のメッセンジャーボーイを雇って、アンケートを回収していた」という冗談半分の噂が広がったそうだ。

いよいよマーヴとお別れの時が来た。マーヴが彼の車でイーストランシングのグレイハウンド・バスの停留所まで送ってくれた。だが、バスが到着するまでかなりの時間があった。ここのバス停は学生の乗車と下車があるからだろう、ただのバスストップでなくて、一応複数台のバスが並んで止まることが出来るスペースがある。そこに車を止めて、私は、彼と出会ったトロント大学の最初の日から共に学んだ六年余のことを想い出していたのか、それとも外のことを考えていたのか定かでない。ただ一つ覚えていることは、これでマーヴと二度と会えないのではないかという思いと不安であった。

当時、日本は貧しかった。その頃の私は、六年前の日本の状態しか知らなかった。日本人もぼつぼつ海外にでかけることができるようになっていたが、それは企業のお金で海外へ出張できる人たちのことだ。関学に戻ったら、二度と北米に帰ってくることは難しいだろうという思いが強かった。マーヴも、この六年間を振り返り、共に過ごした想い出に浸っていたのだろう。二人はただ黙って、彼の車のフロントシートに座っていた。バスがきた。ふたりはアメリカ人がやるように、ハグして"Good bye"でなく"See you!"「またな」とだけ言ってバスに乗り込んだ。涙を流さずにいる自分が不思議だった。バスが動き始めた。彼は、バス停の一番前に立って手を振ってくれた。私も、バスの窓を叩くように手を振った。

バスはワン・ブロック行って、どうしたことか角を曲がり、付近を一周して、今出たバスストップに戻ってきた。マーヴが立って手を振っていた場所にはもう誰もいなかった。その途端、私の両眼から涙が流れ出した。拭いても拭いても、涙は止まらなかった。

## 4　アメリカのお父さん・お母さん、さようなら

いよいよミシガンにお別れをつげる時がきた。モントゴメリー先生ご夫妻（キングとツルーディー）と、一年前に「本当に」養子として籍を入入れたジミーの三人で、私をデトロイト空港まで送って下さった。ツルーディーとキングというまさに親代わりのモントゴメリー先生ご夫妻にお会いしなければ、私はトロント大学での二年間の後、一年デトロイトのメリル・パーマー研究所での勉強が終わったらすぐに日本へ帰っていただろう。米国の博士後期課程で勉強するということが、後の私の大学教員人生での基礎学力を身につけるという意味で、実に大きな収穫だっ

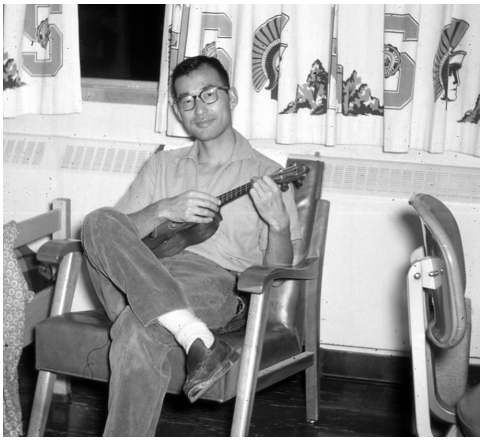
た。そうして、母校関学で教員としてのキャリヤーをなんとか可能にして下さったのがこのご夫婦だった。お二人にお目にかかることがなければ、私の人生はかなり違ったものになっていたことだろう。

だが、先生のお宅から比較的近いデトロイト空港まで送って戴く途中で、私はお二人にお世話になった感謝の気持ちを十分にお伝えすることもできず、親のように私のありとあらゆる面倒を見て下さったお二人との別れに、恐れおののいていた。

待合室で、飛行機に乗り組むまでの間、ジミー君と遊んだことしか覚えていない。ただ搭乗のアナウンスがあっても、なかなか飛行機に乗ろうとしない私を見て、ツルーディーから「飛行機が出てしまうわよ」と促され、三人とハグしてタラップを上がった。幸い、私の席からは、モントゴメリー家の皆さんが地上の建物の外まで出て、手を振って下さるところをはっきり見ることが出来た。私は飛行機の窓に子どものように額と鼻をくっつけ、三人の姿を食い入るように見つめていた。

飛行機は少しずつ動き出した。その時、私は日本に戻ったら、もう二度と北米に帰ってくることは出来ないだろうと思っていたのだった。

ミシガン州立大学　1961 年



（写真 1）ウクレレ青年

（写真 2）寮の国連４人組